

まだま

第 1 号



2007

豊見城市教育委員会 文化課

ま だ ま

－ 書名について －

「まだま」とは美しい玉を意味する琉球の古語で、これから転じて「貴重なもの」「すぐれたもの」という意味に用いられました。また、古くから真玉橋や真玉湊まだまみなと(現在の国場川河口部)の名にも採られるなど、豊見城ともゆかりの深い語です。

文化課では、市史編纂・文化財保護・文化振興などの取り組みについて紹介する冊子を発刊するにあたり、豊見城のすぐれた文化について市民の皆さんをはじめ広く内外に知っていただき、その価値の再認識に貢献することができるようにとの願いを託し、本書の標題を「まだま」としました。

多くの皆さんが本書を通じ、豊見城の「まだま」ともいえる文化の一端にふれていただければ幸いです。

市史移民編 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」関連のとりくみ

ー「世界のトミグスクンチュ歓迎会」での聞き取り調査と移民関連展示についてー

赤嶺みゆき(市史「移民編」編集業務嘱託)

1 はじめに

去る 2006 年 10 月12日、「ひろがるチムグクル つなげるチムチュラサ」をキャッチフレーズに、「第4回 世界のウチナーンチュ大会」が開催された。

「世界のウチナーンチュ大会」は、世界各地で活躍する沖縄県系人が故郷である沖縄に集まり、さまざまなイベントを通して相互理解を深める目的で開催されている大会である。

今回の大会には 21 カ国 3 地域から過去最多の約 4, 700 人が参加し、大会の様子は新聞やテレビで大きく取り上げられた。特に、ハワイ県人会員約 800 人がチャーター便 2 機で那覇空港に到着したことは大きな話題となり、機内で沖縄民謡を歌ったりカチャーシーを踊ったりと、大変な盛り上がりを見せた様子が連日報道された。

また、大会前のイベントとして、海外に住むウチナーンチュの子弟を沖縄に招待し、歴史や文化を沖縄の子ども達と交流しながら学ぶ「ジュニアスタディツアー 2006」や、県内の小・中・高校生と交流し、移民の歴史や異文化について学ぶ「一校一国運動」、元 2 世通訳兵への感謝状贈呈、平和体験・植樹ツアーなどが行われた。

大会の前夜祭では、各国から訪れた参加者が民族衣装やカジュアルウェアで国際通りをパレードし、多くの県民から歓迎をうけた。

「世界のウチナーンチュ大会」の開催にあわせ、各市町村でも沖縄に帰ってきた大会参加者を歓迎しようと、参加者を招待しての歓迎会やレクリエーションが企画された。豊見城市においても海外から帰ってきたトミグスクンチュを招待し、歓迎会を行った。

文化課では現在、市史『移民編』の編集作業を進めていることから、海外に在住するトミグスクンチュに関する情報などを幅広く収集することを目的に、歓迎会の機会をとらえて参加者を対象とした聞き取り調査を行うことにした。

また、「世界のウチナーンチュ大会」の開催に向けての取り組みとして、これまでの調査で得られた情報や移民関連資料の展示を行い、広く市民に対して市史『移民編』の編集作業の成果について紹介した。

本稿では、今回の調査と移民関連展示について、そのあらましを報告する。

2 移民関連展示について

「第4回 世界のウチナンチュ大会」の開催にあわせ、現在文化課で進めている市史『移民編』の調査過程で得られたさまざまな情報や収集資料など広く市民に紹介し、本市の移民の概要やその歴史的背景について理解を深めてもらうことを目的とし、移民関連展示「豊見城と移民－戦前期に海を渡ったトミグスクンチュ－」を行った。

展示は、豊見城市役所1階ロビーで平成18年9月15日（金）～10月6日（金）までの約1ヶ月間行った。展示の内容は、豊見城の移民についての概況や、移民者数を把握するための基礎資料となる「海外旅券下付表¹⁾」についての説明、南洋群島や満州などへの渡



写真1 市役所1階ロビーにて行った移民展示

航者を除いた、大字にみる戦前移民者数や豊見城出身者の主な渡航地について、写真や地図を用いて解説した。その他にも、豊見城からの渡航先で最も多い地域であるハワイ・フィリピン・ブラジル・ペルーへの最初の渡航者についてふれ、各地域での移



写真2 展示の様子

民の生活の様子や、渡航者の中でも代表的な人物に関しては、写真パネルにして展示した。また、移民に興味を持ってもらおうと、移民に関する興味深い事実やエピソードなどをクイズ形式で紹介した。

現在のパスポートにあたる海外旅券や移民契約書²⁾、ハワイで日本人移民の子どもたちが使っていた道德の教科書である『修身書』、豊見城初のフィリピン移民である

字渡嘉敷の赤嶺亀次郎氏^{かめじろう}とその兄弟がフィリピンで経営していたマニラ麻農園「ブナワン赤嶺兄弟拓殖株式会社」^{あさ}に関する領収書や納税関係書類、字名嘉地の上原仁太郎^{じんたろう}

*1 海外旅券（パスポート）1通ごとの発行内容を記録したもの。

*2 契約移民として渡航する際、移民会社と交わした契約書。

氏³が戦後豊見城村へ寄贈したフィリピン移民関係の写真帖『ダバオの思い出』など、これまでに収集した移民関係資料の展示も行った。また、外国の方も理解できるように、展示パネル類には英訳も併記した。

海外からのウチナーンチュ大会参加者にも見てもらい、現在も各地域で生活しているトミグスクンチュについて情報や資料の収集を呼びかけるため、トミグスクンチュ歓迎会の会場内で同様の展示を行った。歓迎会会場での展示には、前述の展示内容にくわえて保栄茂自治会の協力により、1951（昭和 26）年ハワイ在住の保栄茂出身者が字へ贈った生地で作った豊年祭用の衣装も展示することができた。これらの衣装はハワイから贈られたとあって、フラダンスやサーフィンをする人物の図柄が描かれた生地で作られた着物もあった。スペースの都合上、すべての衣装の展示は行えなかったが、ハワイと豊見城との関わりを垣間見ることができる貴重な資料であった。

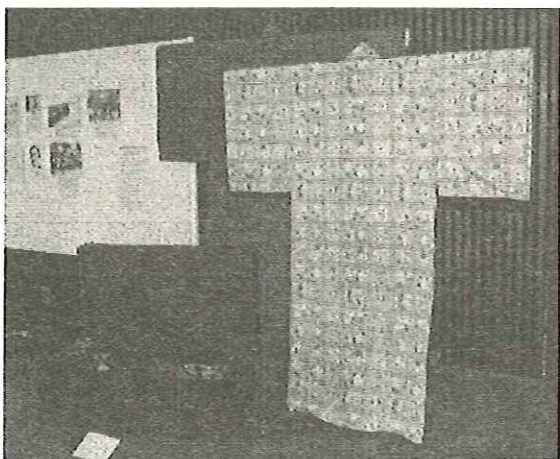


写真3 保栄茂自治会より借用した豊年祭用の衣装

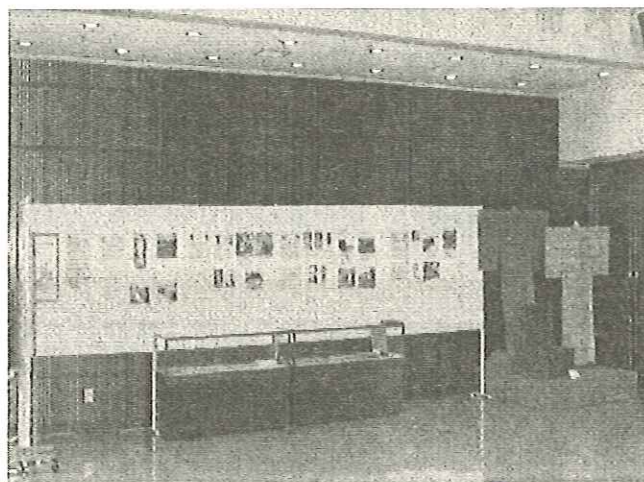


写真4 歓迎会会場での展示の様子

*3 フィリピンで活躍した沖縄県人の一人で、ダバオ日本人会長や沖縄県人会の役員を務めた。

3 「第4回 世界のトミグスクンチュ歓迎会」について

「世界のウチナーンチュ大会」に参加するため世界各国から訪れたトミグスクンチュを本市に招待し歓迎する「世界のトミグスクンチュ歓迎会」は、これまでに3回行われてきた。第1回からの参加者数をみると、1990（平成2）年に行われた第1回には21人が参加した。1995（平成7）年に行われた第2回は8人、そして2001（平成13）年に行われた第3回は21人が参加した。

第4回となる今回の参加者は、過去最多の22人であった。参加者の内訳は以下のとおりである（表1参照）。

(表1)「世界のトミグスクンチュ歓迎会」への参加者数

	アメリカ本土	ハワイ	ブラジル	ポリビア	ペルー	合計
第1回 (平成2年8月24日)	4	3	9	2	3	21
第2回 (平成7年11月17日)	1		7			8
第3回 (平成13年11月2日)	6	8	7			21
第4回 (平成18年10月13日)	8	5	8	1		22

今回の「第4回 世界のトミグスクンチュ歓迎会」は、「本市出身の海外移住者やその子弟との交流、世界に広がるウチナーンチュネットワークの継承・深化・拡充を目指す」ことを趣旨として、2006（平成18）年10月13日、豊見城市立中央公民館において開催された。

歓迎会の内容は、次に掲げるプログラムのとおりである。

第4回世界のトミグスクンチュ歓迎会プログラム

第一部・お茶会

第二部・歓迎会

1. 幕開け：『かぎやで風』
2. 市長あいさつ
3. 議長あいさつ

寿 乾杯の音頭

～ 食事タイム・懇談 ～

5. 世界のトミグスクンチュ紹介
6. 古酒（コース）づくり
7. 記念品贈呈
8. 世界のトミグスクンチュ代表あいさつ

寿 余興：『日傘踊り』

『加那ヨ一天川』

『エイサー』

カチャーシー

10. お開き

第1部のお茶会では、海外から来た参加者を温かい抹茶と菓子でもてなした。『かぎやで風』で幕開けした第2部では、金城豊明市長、大城英和市議会議長の挨拶に続き、上原義雄市商工会長の音頭によって乾杯が行われた。続く世界のトミグスクンチュ紹介では、海外からの参加者全員が舞台上り、一人一人が自己紹介を行った。

歓迎会に初めて参加したというボリビアの比嘉次雄さん（嘉数出身）は「豊見城のみなさん、チャーガンジュですか？（ウチナアンチュ）大会も、この歓迎会も初めての参加です。どこに行ってもウチナアンチュは頑張っています。ウチナアンチュであること、トミグスクンチュであることにこれからも誇りを持って頑張っていきたい」と述べた。

ブラジルから参加した金城 João マサヒロさん（真玉橋出身）は、「心はいつまでもウチナアンチュ」と、方言を交えて挨拶を行った。

ハワイから来た大城ちよこさん（保栄茂出身）は、「イッペーニフェーデービル。心から感謝します」と、力強く挨拶した。

古酒コースづくりでは、トミグスクンチュのネットワークの絆の熟成を祈念することを目的として、参加者全員によって大きな酒甕さけがめに泡盛が注がれた。参加者の中には、初めて泡盛を手にしたのか、注ぐ前

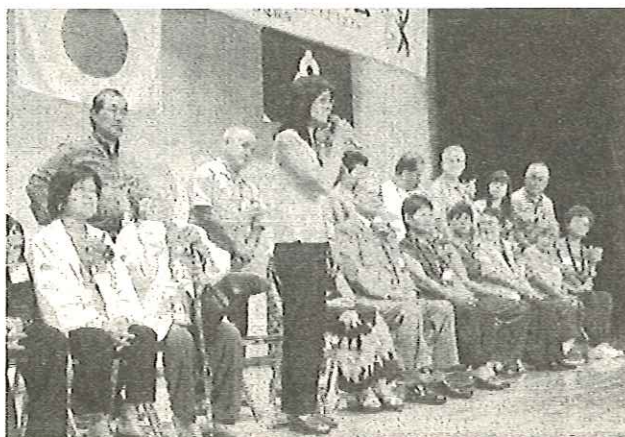


写真5 世界のトミグスクンチュ紹介で挨拶をする大城マレーンさん



写真6 古酒づくり

のルーツに触れることができることを、心から感謝します」と世界のトミグスクンチュを代表して挨拶した。

その後、琉舞や市ジュニアリーダークラブによるエイサーなどの余興に移り、そして最後にはカチャーシーと、盛りだくさんの内容となった。

参加者の方々は、沖縄料理を楽しみながら舞台上で演じられる琉舞を鑑賞したり、写真を撮ったりと、あちらこちらで歓迎会を楽しむ様子が見受けられた。最後のカチャーシーでは、参加者全員が音楽に合わせて慣れた手つきで踊る人や、見よう見まねで踊る人など、会場いっぱいに笑顔があふれた。

歓迎会では、方言や日本語の他、英語、ポルトガル語、スペイン語など様々な言語が飛び交う場面もみられ、トミグスクンチュが世界の各地域で活躍していることを改めて感じた。

に香りを楽しむ姿も見られた。今回の歓迎会で注がれた酒は、次回の歓迎会でふるまわれる予定で、現在は市長室に保管されている。

続いて行われた記念品贈呈では、海外からの参加者一人一人に本市の特産品であるウージ染めのシャツが贈られ、ブラジルの赤嶺尚由さん（渡嘉敷出身）が「豊見城で自分の生命



写真7 世界のトミグスクンチュを代表して挨拶する赤嶺尚由さん



写真8 歓迎会の様子

4 歓迎会での調査

①調査の方法

歓迎会の中で、いつ・どのように聞き取り調査を行うのかについて、本市の歓迎会担当課と事前に何度も調整を行った。その結果、第一部のお茶会の場で、お茶を点^たている時間を利用して行うことになった。

移民に関する聞き取りを行う際、まず問題になるのが言葉である。沖縄から初めての移民者が出て1世紀以上経過しているため、日本語を話せない県系人も多い。前回の歓迎会では英語・ポルトガル語しか話せない参加者もみられたという本市側の出席者からの情報も得ていたため、調査をスムーズに行うには通訳が必要ではないかということになった。

そこで、市広報で英語、ポルトガル語、スペイン語などによる日常会話が可能で、調査票に沿って聞き取りや通訳ができるボランティア調査員の募集を行った。市広報への募集告知の掲載後、英語による通訳が可能な3人の方から調査に協力したいとの連絡を受け、その方々を含めた事前打ち合わせを行い、調査の趣旨や方法、歓迎会当日の日程等について説明した。

当初、今回の歓迎会参加者は15、6人という情報を得ていたため、ボランティア調査員と文化課職員の2人1組での調査を予定していた。しかし、歓迎会当日になって参加者が大幅に増えたため、ボランティア調査員は外国語のみを話す参加者に、文化課職員は日本語での会話が可能な参加者への聞き取りを行う方法をとることにした。

なお、調査担当者は、各自調査票とテープレコーダーを持って対面調査による聞き取りを行った。

②調査項目と調査票について

調査を行うお茶会は1時間と限られているため、移民した経緯や移住地での生活などについての詳しい内容の聞き取りは難しいのではないかという意見が挙がった。

そこで今回の調査では、連絡先、出身国、世代、沖縄での連絡先、話せる・書ける言語、家系図などの項目を設けた調査票を事前に作成し、この調査票に沿って聞き取りを行い、今後の詳細な調査への基礎資料づくりとして位置づけることにした。

また、日本語が話せない方がいることを想定し、調査票の各項目には英訳も付け加えた。

実際に今回の調査で使用した調査票は次のとおりである。

世界のウチナーンチュ大会用海外移民調査票

調査年月日 2006年 月 日

調査員名

フリガナ	現地表記 Name of your own country	
氏名 Name of Japanese		
国名 Country	性別 Sex 男 Male ・女 Female	世代 Generation 世
生年月日 Date of Birth 年 year 月 month 日 day		
住所 Address		
Phone	Fax	
E-mail		
沖縄での連絡先 Address in Okinawa 住所		
Phone number	/Fax	

1. 滞在期間 The length of your stay

2006年 月 month 日 day ~ 月 month 日 day まで

2. 沖縄での滞在場所(住所と電話番号)

The address and phone number where you stay in Okinawa

・親戚の自宅 Relative's home

・友人・知人宅 Friend's home

・その他 Others

3. 聞き取り調査を行ってもよいですか？

Could you cooperate on our investigation about emigrants of Tomigusuku?

はい Yes ・ いいえ No

↓

※「はい」の場合 …… 調査を行える時間

*If you can … time and place for the interview.

日付 Date : _____ 月 month _____ 日 day

時間 Time : _____ 午前 am ・ 午後 pm (_____) 時頃～

場所 Place : _____

4. 言語

What language can you speak?

- ・ 日本語 Japanese
- ・ 方言 Okinawan dialect
- ・ 現地の言葉 Language of your country

(ポルトガル語 Portuguese / スペイン語 Spanish / 英語 English)

5. 日本語は読み書きできますか？

Can you read and write Japanese?

Read : Yes / No

Write : Yes / No

☆ 家系図 Family Tree

1世から記入をお願いします。

If it is available, please fill out from 1st. generation.

5 歓迎会での聞き取り調査

午後3時30分、参加者の受付が開始されると同時に、続々と参加者が訪れ始めた。海外からの参加者は、受付で住所氏名などの記帳を済ませると、胸に花のコサージュを付けてもらった。「久しぶり！」という言葉があちらこちらで飛び交い、中には再会を喜び抱きしめ合う姿も見受けられた。



写真9 キャンプ一家に聞き取りを行うボランティア調査員

受付を済ませた参加者から順次お茶会の会場へ案内され、抹茶と菓子が振る舞われた。今回の聞き取り調査は、席についてお茶が運ばれてくるまでの時間を利用して行った。

ポルトガル語のみ話す方に関しては、ボリビアから参加した比嘉次雄さんに通訳をして頂き、英語のみ話す方にはボランティア調査員に聞き取りを行ってもらった。

笑いを交えながら調査に答える方や、「日本茶が飲みたかった！」と、嬉しそうにお茶を口にしながら応じる方など、和やかな雰囲気の中で調査は進んだ。

今回の歓迎会には過去最多の22人が参加し、うち13人の方々に聞き取り調査を行うことができた。歓迎会参加者22人は次のとおりである（表2参照）。

(表2)「第4回 世界のトミグスクンチュ歓迎会」へ参加した豊見城市関係者

	国	県人会	氏名	出身字	世代	備考
1	ブラジル	ブラジル沖縄県人会	赤嶺尚由	渡嘉敷	1世	妻と参加
2			金城文子	真玉橋	1世	
3			金城João まさひろ	真玉橋	2世	金城文子さんの弟
4			金城セシディア			金城文子さんの弟カズオさん(故人)の妻
5			大城マレーン	平 良	2世	夫と参加
6			Aparecida Akamine Guenka		2世	
7	ボリビア	ボリビア沖縄県人会	比嘉次雄	嘉 数	1世	ボリビア沖縄県人会会長
8	アメリカ	タンパベイ沖縄県人会	Massingale 大城洋子	長 堂	1世	
9			金城春子 Lewis	饒 波	1世	
10		アトランタ沖縄県人会	Shelton 喜友名節子	豊見城	1世	
11			キャンプよしこ	高 嶺	1世	夫と参加
12			キャンプジャック	高 嶺	2世	キャンプよしこさんの息子。妻と参加
13		フロリダ沖縄県人会	赤嶺利子 Rodack	座 安	1世	
14		ハワイ沖縄連合会	大城ちよこ	保栄茂	2世	
15			大城ジュディ	保栄茂	3世	大城ちよこさんの姪
16			喜友名はるみ Rachel		3世	夫と参加
17			島袋八重子	高 安	1世	

※参加者22人のうち、5人は付き添いとして参加していたため、省略した。

このうち、聞き取り調査を行うことができたのはアメリカ本土 5 人、ブラジル 4 人、ハワイ 3 人、ボリビア 1 人の計 13 人であった。この 13 人のうち、1 世^{*4}は 9 人、2 世は 3 人、そして 3 世は 1 人であった。1 世は全員が日本語と現地の言葉が話すことができたため、聞き取り調査も比較的スムーズに行うことができた。2 世、3 世になると、普段の会話は現地の言葉が主になるため日本語をあまり話せず、通訳となる親戚の方々と一緒に参加していた。

ここでは、今回聞き取りを行った方 13 人のうち、詳しく話を聞くことのできた 7 人について紹介することにした。



写真10 比嘉次雄さん

①比嘉次雄さん（ボリビア・1世）

戦後移民。現在、ボリビア沖縄県人会の会長や豊見城村人会代表を務めており、オキナワ^{*5}・ボリビア歴史資料館初代館長でもある。今回初めての参加とあって非常に楽しみにしていたという。ボリビア在住のトミグスクンチュについて尋ねたところ、トミグスクンチュの多くは他国へ再移住、または帰国し、現在は少ないということであった。

滞在中の 10 月 13 日には、本市伊良波中学校 1 年生 2 クラス約 80 人に、ボリビアについての出前授業を行った。



写真11 大城ちよこさん

②大城ちよこさん（ハワイ・2世）

戦前移民。10 人兄弟の長女として 1919 年ハワイで生まれ、日本の教育をうけるため幼少時代は豊見城で過ごした。その後ハワイへ戻り、今日までハワイで生活している。



写真12 喜友名はるみレイ
チェルさん

③喜友名はるみレイチェルさん（ハワイ・3世）

戦前移民。豊見城に住む親戚に会いたいということで歓迎会に参加し、会場で初めて親戚に会うことができた。

*4 移民した最初の世代

*5 ボリビアには、沖縄県出身移民者が形成している移住地「オキナワ村」がある。2002 年には、ボリビア政府が自治権を承認した。



写真13 赤嶺利子ロウダックさん

④赤嶺利子ロウダックさん（フロリダ・1世）

米国の男性と結婚し、戦後渡米。フロリダ沖縄県人会内に豊見城出身者がいるのかを尋ねたところ、他にはいないとのことであった。



写真14 金城春子ルイスさん

⑤金城春子ルイスさん（タンパベイ・1世）

米国の男性と結婚し、戦後渡米。現在は一女に恵まれている。



写真15 金城文子さん

⑥金城文子さん（ブラジル・1世）

戦前移民。1934年、10歳のときに父からの呼び寄せでブラジルへ渡航。歓迎会には弟の João まさひろさん、義妹のセシディアさんと一緒に参加していた。「沖縄の方言を大切にしてください」と、何度も話してくれた。



写真16 赤嶺尚由さん

⑦赤嶺尚由さん（ブラジル・1世）

戦後移民。ブラジルと沖縄の架け橋として新ウチナー民間大使に認証されている。

ブラジルに渡航後、現地で新聞記者として働いたこともあり、現在でも邦字新聞「サンパウロ新聞」に記事を掲載するなど、多方面で活躍している。

現在、ブラジル沖縄県人会の評議委員会委員で、ソールナッセンテ人材銀行社長。

時間の都合上、移民した経緯や、移民地での生活や仕事などについては詳しい話を聞くことができず、また、何人かの方はお茶会終了後に歓迎会に参加されたため、参

加者全員への聞き取りは行えなかった。しかし、調査に応じていただいた参加者の方々は非常に協力的で、後日聞き取り調査に協力したい、国に帰ってから資料を探してみます、などの言葉をいただいた。



写真17 世界のトミグスクンチュとの再会を祝して乾杯

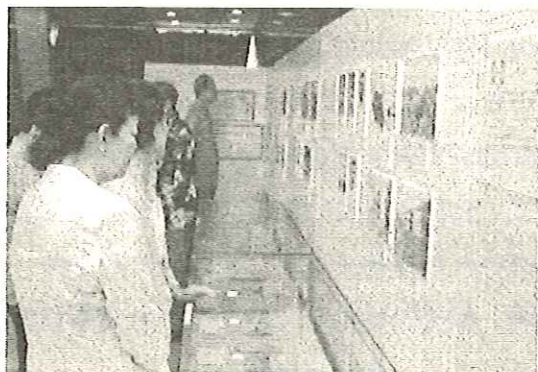


写真18 展示をみる参加者



写真19 笑顔で調査に応じる大城ちよこさん



写真20 再会を喜ぶ島袋八重子さん



写真21 参加者全員でのカチャーシー

6 むすび

今回、市史『移民編』の編集作業中に「世界のウチナーンチュ大会」が行われたことにより、海外から里帰りしたトミグスクンチュに話をお聞きすることができた。「海外でもトミグスクンチュは頑張っています」という参加者の言葉通り、現地で沖縄県人会の活動に参加したり、「豊見城市人会」を結成したりと、その活躍は幅広い。

歓迎会に参加した方々は沖縄各地の観光や墓参り、親戚・知人との面会など、多忙なスケジュールの中での参加となったようだが、非常に楽しかったという感想が多く聞かれた。

展示を見た市民の方からは「豊見城からこんなにたくさんの方が海外に渡ったことを初めて知った」、「今後の調査に期待している」という声を聞くことができ、移民に対する関心の高さを知ることができた。なかには、「写真に父が写っている」と文化課を訪れて、フィリピンでの生活を話してくれた方もいた。

本市から最初の移民が出て1世紀が経過し、現地では3世、4世、5世の時代へと変わりつつある。移民した当時の社会状況や、移民先での生活、現地での戦争体験、子弟の教育、そして現在の日系人社会・現地の市人間の交流など、彼らが本市に与えた影響についても明らかにする必要がある。

現在では豊見城からの移住者、特に1世や2世の高齢化は著しく進んでおり、早急に移民に関する詳細な調査を行う必要があると感じた。

なお、歓迎会には参加できなかった座安アール実雄さん（ハワイ・3世）、下村フロレンスさん（ハワイ・2世）一家には、後日宿泊先で面会することができ、わずかな時間ではあったが話をうかがうことができた。

最後に、今回の展示で紹介した多くの移民関係資料を提供下さった赤嶺夫保^{せこやす}さん、宜保マウロさん、保栄茂自治会、展示解説文の英訳をしていただいた長田亮一先生、歓迎会でボランティア調査員としてご協力頂いた石原純子さん、比嘉やよいさん、金城涼子さん、歓迎会を担当した市企画振興室、写真を提供していただいた市広報係をはじめ、関係者の方々に対し深く感謝申し上げて、本稿を結びたい。

平成18年埋蔵文化財に関する調査報告

くがいみつぐ
久貝弥嗣(文化課臨時職員)

はじめに

全国780都市中一位に輝いた豊見城市の成長力は、豊見城市勢の発展を如実にあらわした数字である。その一方で、市内には御嶽や井戸などの古い様相を感じられる場所は今でもすくなくはない。道路際に据えられている石獅子がふと目について、安らぎを感じるのは私だけではないと思う。しかし、時代の潮流の中で失われてきた文化財があるのも事実であり、それは現在も進行中である。

本稿では、これらの失われていく文化財や、調査が行われた文化財についての市民への周知を目的とし、平成18年に市教育委員会文化課が実施した、埋蔵文化財調査についての調査報告を行う。

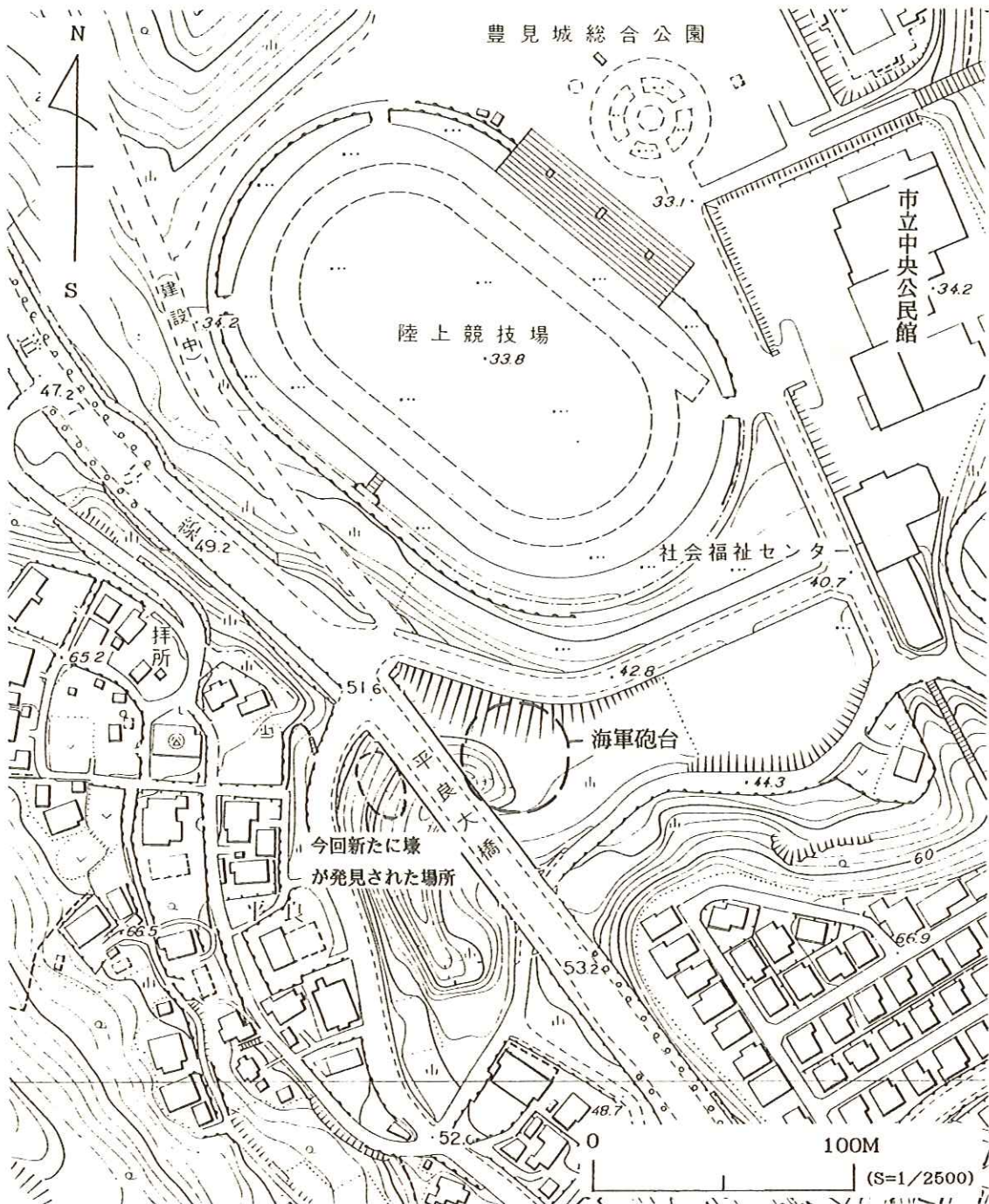
平成18年に市教育委員会文化課が調査を行った埋蔵文化財は、「字平良の海軍砲台に伴う軍構築壕群」、「字高嶺の試掘-高嶺古島遺跡内-」、「我那覇丘陵の軍構築壕群」、「瀬長グスク他範囲確認調査」、「翁長原遺物散布地C地点(石畳遺構)」、「根差部(前原の軍構築壕群)」の6つである。これらの中で、「瀬長グスク他範囲確認調査」以外は、工事などに伴って急遽調査を行ったものである。特に壕については、工事段階で見つかる場合が多く、多くの壕が消滅していく現状にある。市歴史民俗資料展示室では、これらの調査成果と平成17年度に新たに寄贈された収蔵品の紹介を合わせた企画展「新収蔵品展・調査報告展」を、平成18年3月14日(水)～4月1日(日)の日程で開催した。本企画展において市内外の方々へ豊見城市内における文化財調査の状況を理解していただくとともに、本稿において各遺跡の記録を報告し残すことで、将来的な文化財の活用の一端を担えることができれば幸いである。

なお、本稿は市文化課職員の協力を得て久貝が執筆し、記載された図面や写真、遺物などの資料に関しては、豊見城市教育委員会文化課で保管してある。

I. 字平良の海軍砲台に伴う軍構築壕群

1. はじめに

本壕群は、字平良の那覇空港自動車道トンネル工事に伴って発見されたものである。壕群は、平成17年6月に1基、平成18年4月に1基確認され、総数2基におよんだ。壕群は、中央公民館の向かいに位置し、その周辺には海軍砲台があったと『豊見城村史 第6巻 戦争編』に報告されている。今回発見された壕群も、この海軍砲台と関係性があったと推定され、「字平良の海軍砲台に伴う軍構築壕群」として報告したい。



第1図 字平良海軍砲台に伴う軍構築壕群の位置図

2. 壕の概要

平成18年に発見された壕は、トンネルの側面部から壕の片側の壁を破るかたちで確認された。壕の天井部分の崩落の可能性も高かったため、発見部分から壕内を確認するにとどまった。壕はクチャを掘り込んで構築されており、内部には土砂が厚く堆積していた。平成17年に発見された壕が、高さ1.8m、幅2.0mのドーム型をしていたことから、これに類似する形の壕だと推定される。また、平成17年の壕からは、軍刀や馬の骨が出土しており、日本軍と関係性の深い壕であることが推定された。

3. 海軍砲台について

海軍砲台については『豊見城村史 第6巻 戦争編』に詳しく記述されており、ここではその内容を要約して紹介する。

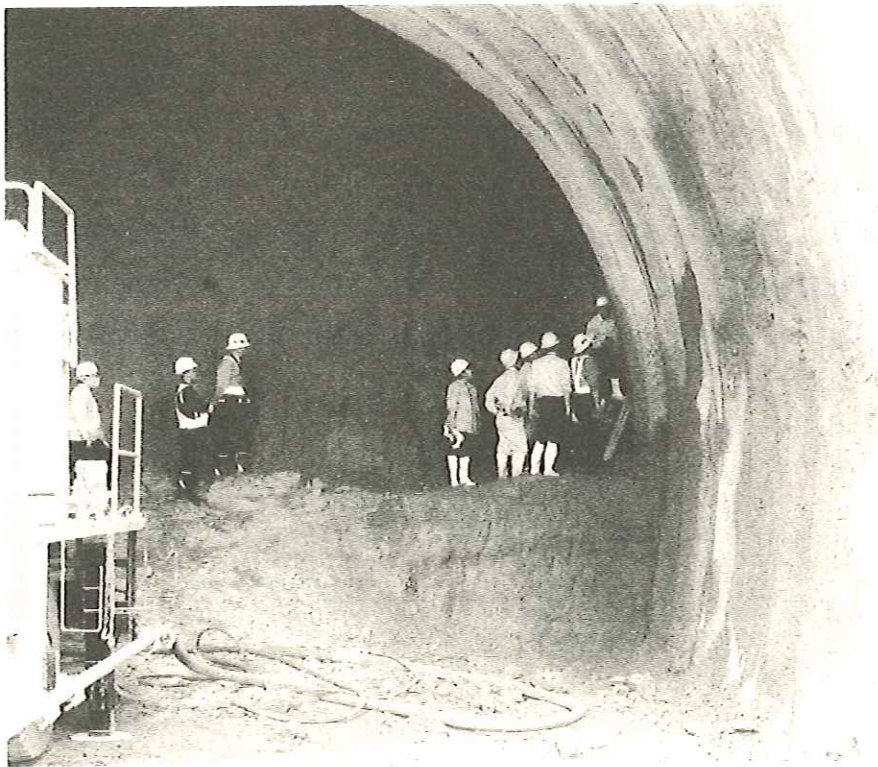
大砲は、1門につき馬6頭曳きで牽引するほどのもので、サーターヤーに2門据えられたという。それらは、海軍部隊の橋本隊と戸成隊に1門ずつ配備され、二位少佐率いる陸軍部隊にその操作法を教わっていたという。やがて1945年2月11日に、陸軍と海軍の臨時混成部隊が編成され、5月に入ると大砲を県道(7号線)と轟川との中間にある河川敷に移動し、浦添方面に向けて砲撃をはじめたという。この砲台は、谷地に置かれ、その前面を小高い丘(グーシーモー)に遮られていたため、米軍に見つかりにくく、かなりの戦果をあげたという。

4. まとめ

今回発見された壕群は、平成17、18年に1基ずつ確認された。平成17年に確認された壕からは、軍刀や馬の骨が確認されたことから日本軍によって構築された壕であると想定される。また、海軍砲台があったとの報告例から、それとの関係性が深い壕群として「字平良の海軍砲台に伴う壕群」として捉えた。平良グスクの位置する丘陵側にも軍の構築壕があったとされ、今後とも本丘陵地から壕が発見される可能性があるといえる。



遺跡遠景



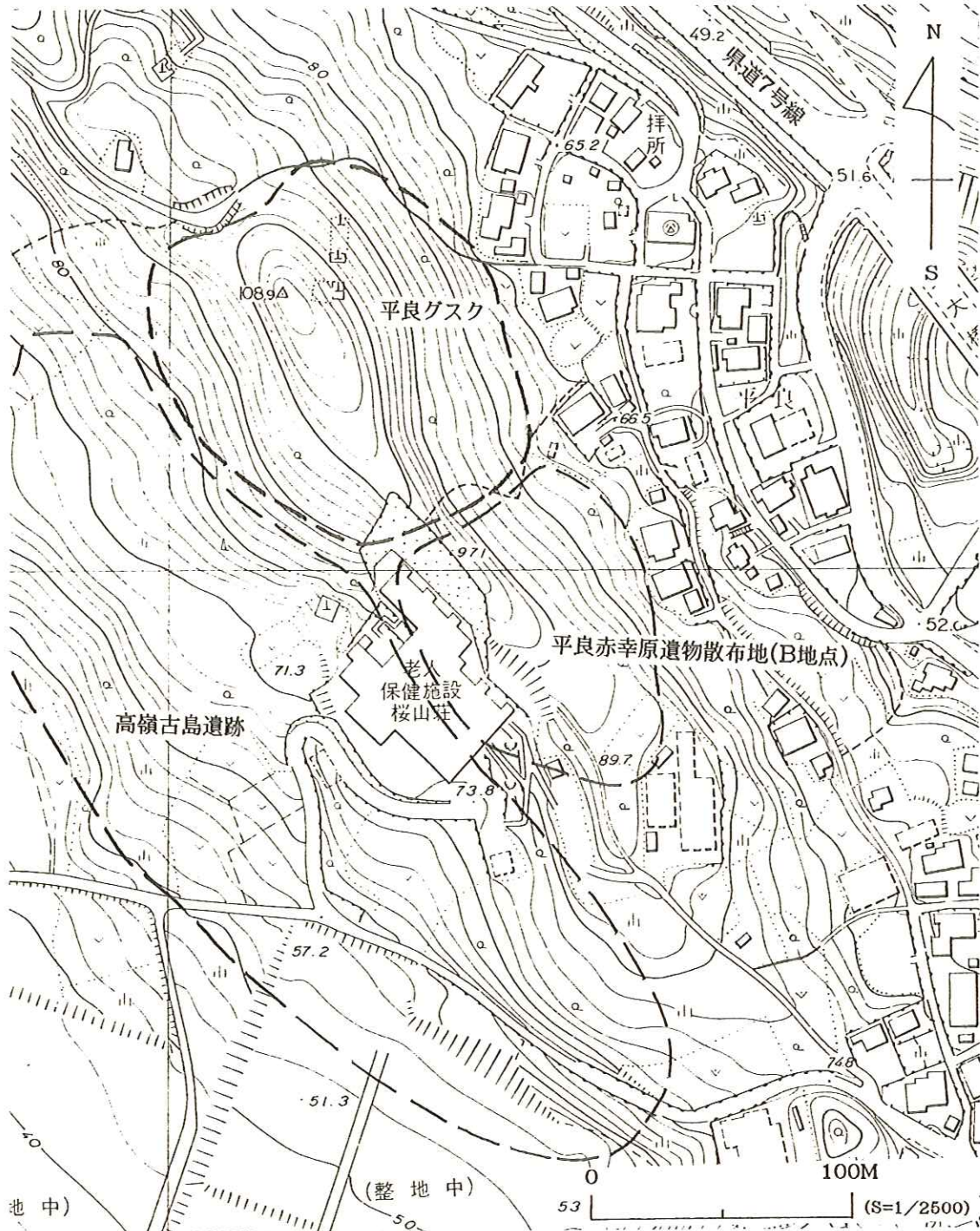
壕内確認状況(平成18年4月)

図版1

あざたかみね しゅくつ たかみねふるじまいせきない
 II. 字高嶺の試掘—高嶺古島遺跡内—

1. はじめに

本調査は、市道26号線の改築工事に伴って行われた。工事範囲は、^{しゅうち}周知の遺跡である高嶺古島遺跡内に位置しており、遺跡が残っている可能性があった。そこで、工事範囲内に2箇所^{ばっさい}の調査区を設定し、平成18年6月28日に、重機を用いて伐採から始め、発掘、埋め戻しまでを実施した。



第2図 高嶺古島遺跡の位置図

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

調査区の立地する丘陵は、北西-南東方向に軸(尾根)をもち、おおむね2つの段丘面をもっている。丘陵上部(仮に第1段丘面)は、最高標高108.9mで、尾根に沿って段丘面をもっている。本面には平良グスクが位置する。その下位の段丘面(仮に第2段丘面)までは傾斜が強く、標高は約75mである。第2段丘面も、尾根にそった形で平場を形成しており、比較的広範囲に広がっている。調査区は、この第2段丘面の南東側の端から丘陵下へ向かう傾斜部に位置しており、現在は畑地として利用されている範囲もある。第2段丘面の北東側には、高嶺古島遺跡が位置し、グスク時代における生活空間が広がっていたと推定される。第2段丘面から丘陵下へは、急斜面を呈している。丘陵下の標高は約37mであり、第2段丘面との高低差は、38mで、周りを丘陵地に囲まれた、盆地状を呈している。

(2) 歴史的環境と周辺遺跡

調査区は高嶺古島の範囲内に位置し、周辺には平良グスク、高嶺原遺物散布地、平良赤幸原遺物散布地(B地点)というグスク時代の遺跡が隣接している。

高嶺古島遺跡は、現在の桜山荘周辺に位置し、1986・87年に発掘調査が行われている。その結果、主な遺構として、「ピット群遺構」が検出され、建物跡のプランが想定されている。遺物としては、土器(貝塚後期・グスク時代)、青磁、白磁、青花、類須恵器などが出土している。主体的な時期は14・15世紀とされるが、土器に関しては、石鍋模倣の最終形態も目立ち、グスク初期の様相も強い。このことから、高嶺古島はグスクの初期段階(12世紀)に出現し、14・15世紀を中心として、17世紀まで継続するグスク時代の居住空間としての性格をもつ遺跡とされる。

平良グスクは、前述したように、本丘陵部の第1平場面に立地している。平良グスクにおいて最も特徴的なものは、炭化米などの炭化物の出土で、その他にも中国製陶磁器、グスク土器、貝製品、鉄製品、骨製品などが出土している。14世紀頃の遺跡として捉えられている。

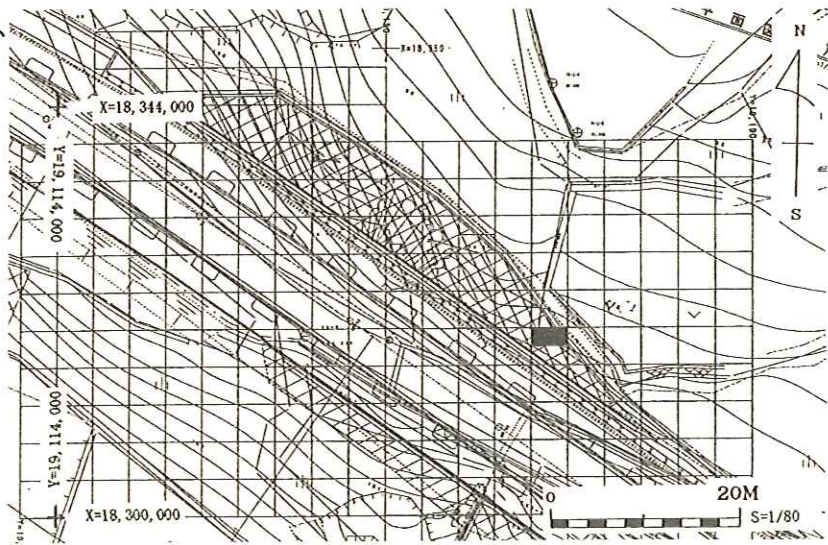
高嶺原遺物散布地は、1988年の分布調査においてグスク系土器、青磁などが畑地から表面採集されており、平良グスクとの関連があったとされている遺跡である。

平良赤幸原遺物散布地(B地点)も、1988年の分布調査においてグスク系土器、類須恵器、近世～近代の陶器片が採取されている。平良グスクと関連するグスク期の集落跡などが考えられている。

以上の点から、本調査区の位置する丘陵地は、平良グスクを中心としたグスク期の生活空間として重要な範囲であったと推定される。

3. 調査成果 ちようさせいか

今回の工事範囲内に、4×4mのグリッドを設定した。その後、発掘可能な範囲として第2段丘面の東端に2箇所
の調査区を設けた。調査区は1×2mで設定し、西側からPt1、Pt2と名付けた。



第3図 調査区設定状況図

(1) 基本層序 きほんそうじよ

Pt1、Pt2両地区とも未の遺物包含層は確認されなかった。しかし、表土や周辺域から、青磁片が確認でき、本来あったグスク時代の層が後世の攪乱を受けたと考える。その攪乱層(Ⅱ層)からは、沖縄産陶器がわずかに出土する。詳細な年代は不明であるが、グスク時代以降として、近世～近代として捉えた。

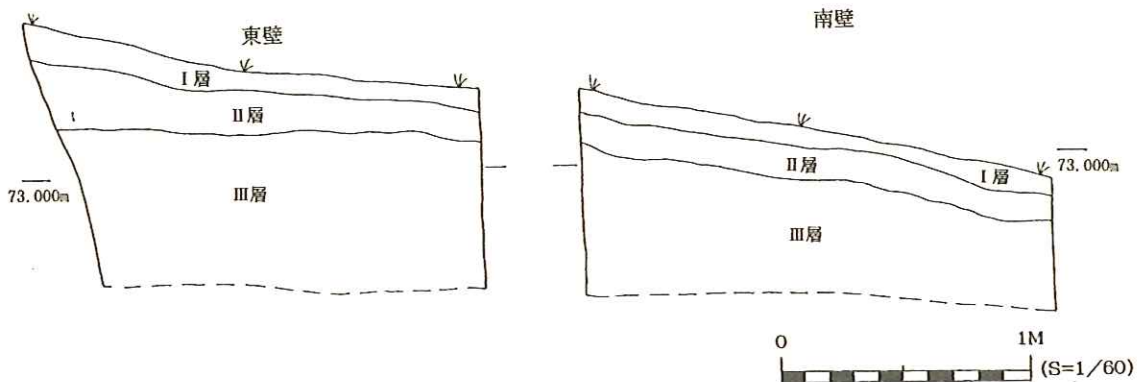
I層：Hue10YR3/4暗褐色。シルト質。現在の表土。貝類、青磁が出土する。

Ⅱ層：Hue7.5YR4/4褐色。シルト質。近世～近代？。5cmほどの石灰岩礫、1～2mmの赤色粒子、などを含む。クチャブロックも含まれており、基盤のクチャにまで及んだ攪乱層と考える。

Ⅲ層：Hue7.5GY4/1暗緑灰色。シルト質。基盤のクチャ層である。

(2) Pt1地区

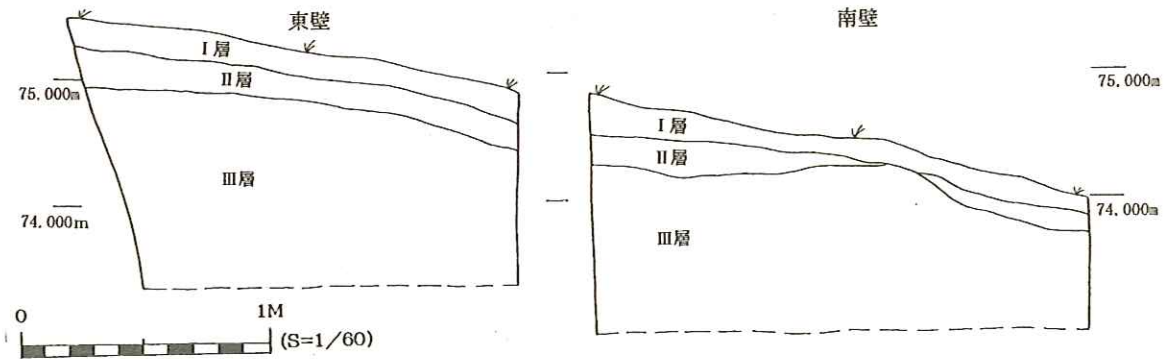
本調査区では、I～Ⅲ層が確認される。Ⅱ層とⅢ層の層理面が水平である点は、Ⅲ層にまで及ぶⅡ層段階の攪乱を証拠づけている。



第4図 Pt1地区南・東壁断面図

(3) Pt2地区

本調査区においても I～III層が確認され、II層とIII層の関係は、Pt 1 と同様である。



第5図 Pt2地区南・東壁断面図

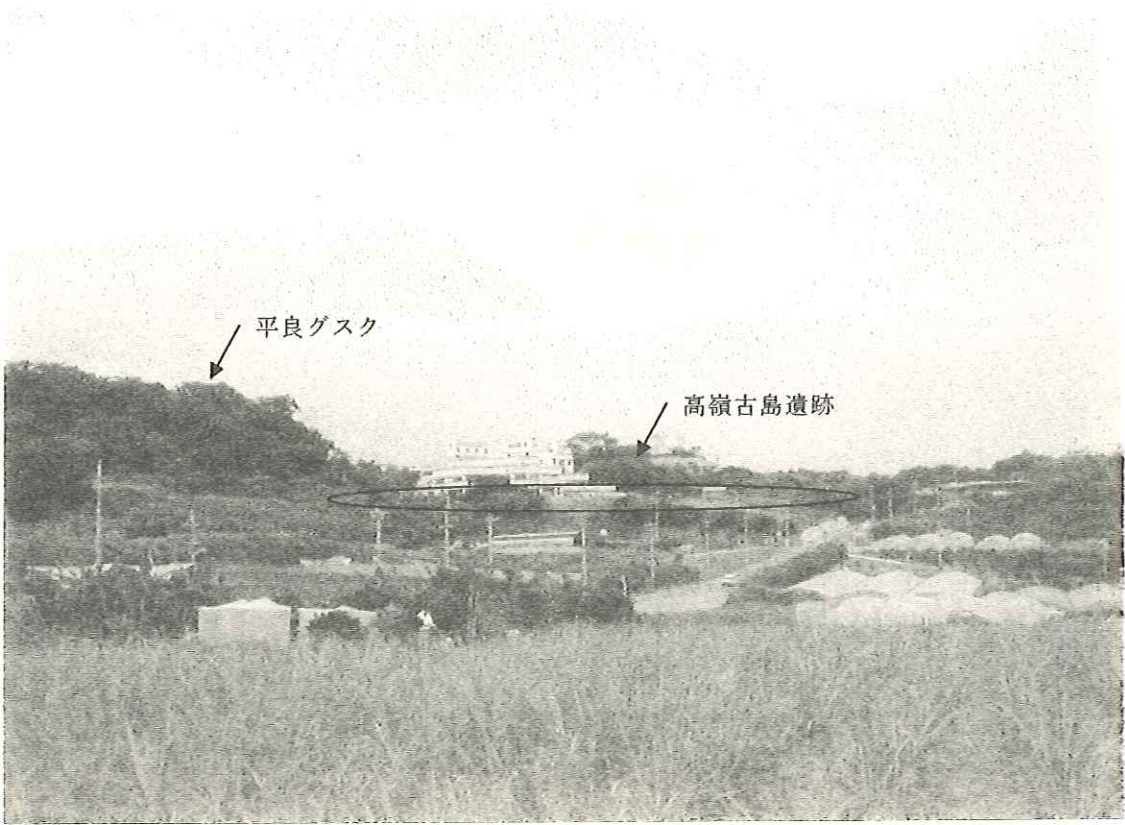
(4) 出土遺物^{しゅつどいぶつ}

今回の調査で得られた遺物は、表採も含めて総数6点であった。いずれの資料も小破片であるため、型式の確認や年代観をとえることは困難であった。

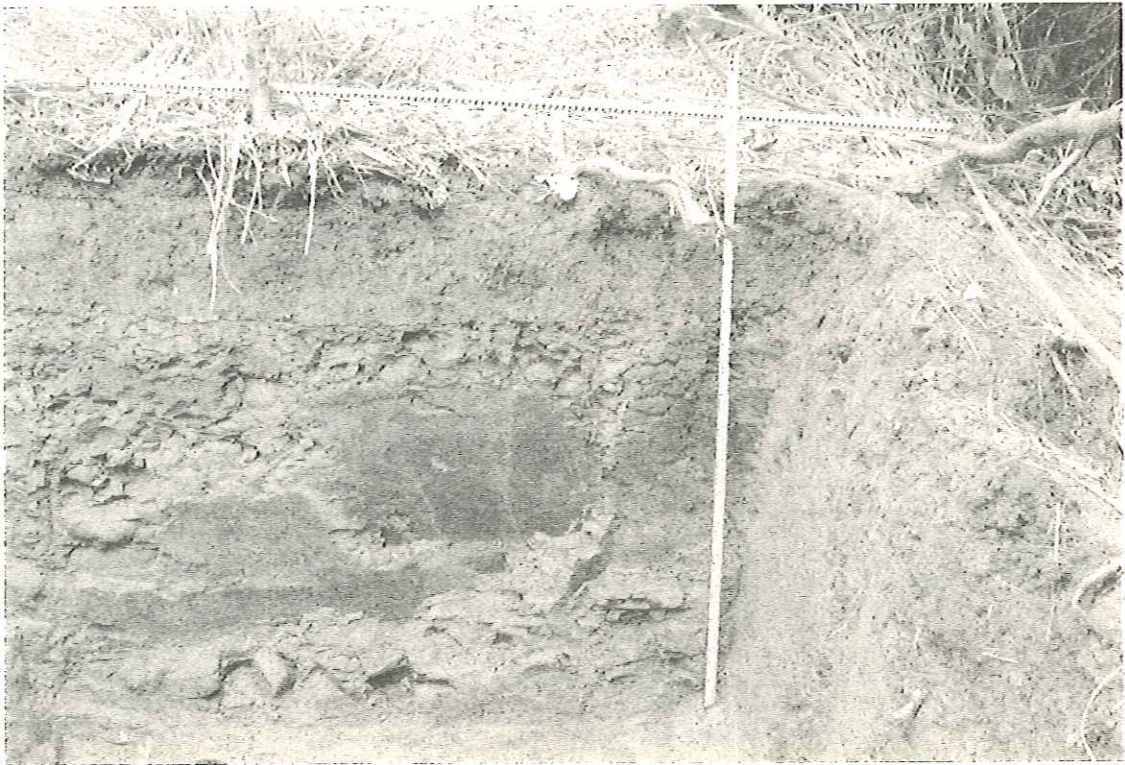
Pt 1・I層より青磁、沖縄産陶器。Pt 2・II層より沖縄産陶器。表採として獣骨や貝類が出土している。

4. まとめと今後の課題

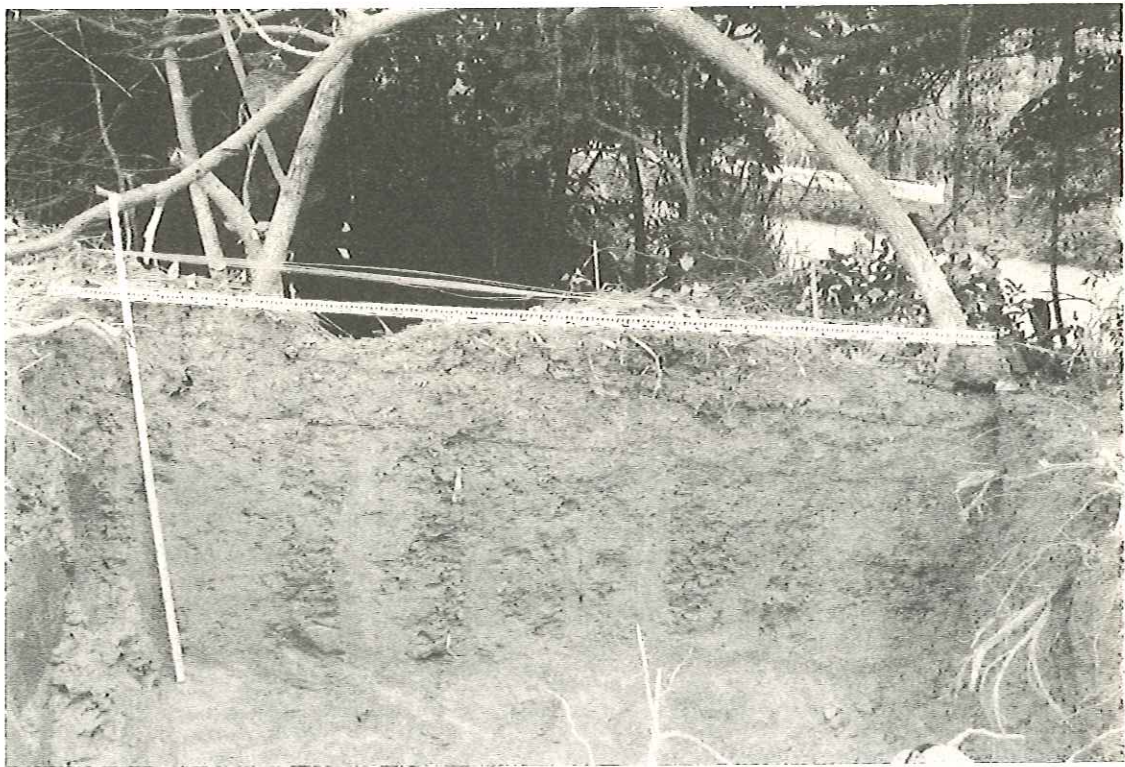
今回の試掘調査においては、未攪乱の遺物包含層は確認されなかった。しかしながら、本調査区の周辺からの遺物の表採状況や、以前に調査された高嶺古島遺跡の報告の状況などから、本来はグスク時代の旧表土層^{きゅうひょうど}が堆積しており、II層の段階において基盤のクチャ層にいたるまでの攪乱を受けたものと考えられる。今後とも、本丘陵地におけるグスク、居住地、生産遺跡、墓域などの総合的な生活空間を考える上で重要な範囲であると考えられる。



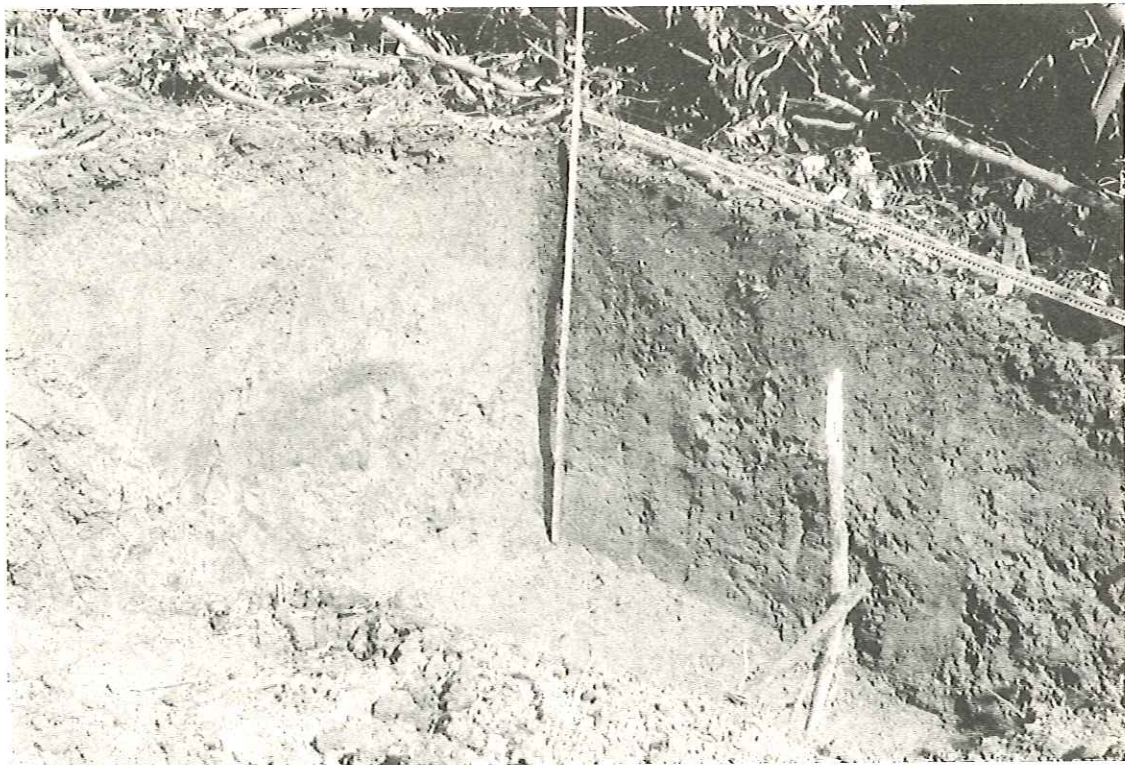
遺跡遠景



P t 1 地点東壁



P t 1 地点南壁

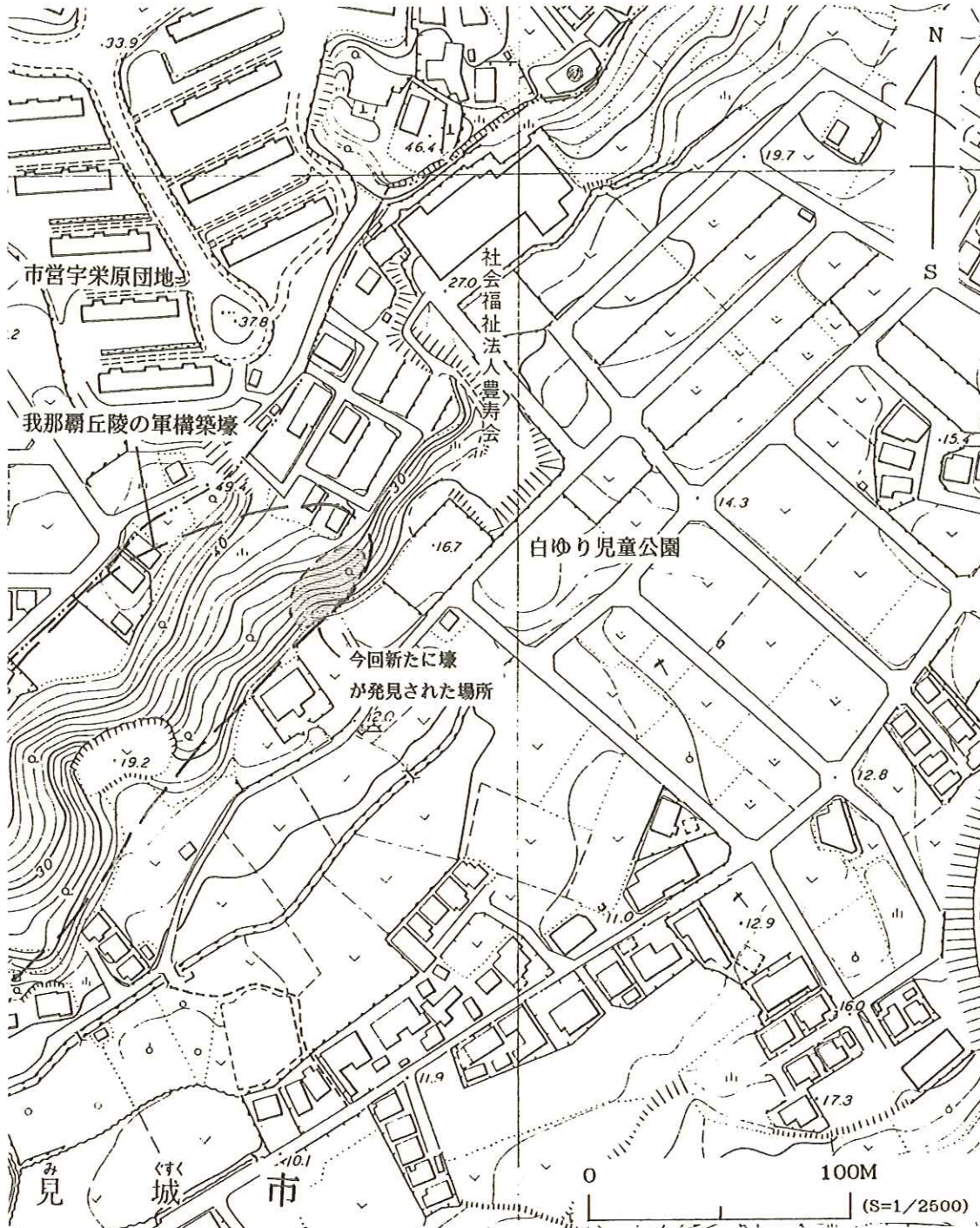


P t 2 地点東・南

Ⅲ. 我那覇丘陵の軍構築壕群

1. はじめに

本壕群は、字我那覇における災害復旧工事の際に発見されたもので、2006(平成18)年6月20日に確認を行った。壕群は、白ゆり児童公園の北西側にある我那覇丘陵の斜面地に位置し、丘陵上からの堆積した土砂に埋まっている状況であった。壕群の位置する我那覇丘陵は、『豊見城村史 第6巻 戦争編』のなかで「我那覇丘陵の軍構築壕」として紹介されており、今回新たに発見された壕群もこの範囲に含まれている。



第6図 我那覇丘陵の軍構築壕群の位置図

2. 壕の概要

今回発見された壕は、総数5基である。いずれも島尻層を掘り込んで構築されている。内部には土砂が厚く堆積している状況であった。

壕1～3は、内部でつながっている状況が確認できた。壕1はその全体形は確認できず、現在高は50cm、奥行きは3.6mで直線的にのびる。壕2は、唯一全体形が確認できた壕である。ドーム形をなし、高さ1.3m、幅1.1mで、奥行きは1.5m直線的にのびた後、壕1に向かって右側におれる。壕内部には、構築時の掘削痕が明瞭に残っている。また、内部の土砂からは陶器類が出土した。壕3は、わずかに壕口が確認されたのみである。壕2と同様に直線的にのびた後、右側におれ壕2を通過して壕1とつながっている。壕1と2の間は2.6m、壕2と3の間は1.3mである、3つは近接している。壕4は、壕3に近接し対称をなす形で入り口が左よりに向いている。内部の状況を確認することはできなかった。壕5は、壕4から3.0m西側に位置している。全体形は不明であるが、現在高1.0m(推定1.6m)、幅1.6mである。

3. 字我那覇における日本軍の駐屯

本壕群が構築された経緯について考えるため、『豊見城村史 第6巻 戦争編』より、字我那覇に駐屯したとされる日本軍の記述について整理してみたい。

・球六四〇三 独立速射砲第三部隊(一法師鐵男少佐) 1945(昭和45)年初頭には、字名嘉地、我那覇両方に移転駐屯したことが分かる。名嘉地から我那覇にかけて両集落の北側丘陵地に同部隊の陣地が構築されていたことがうかがえる。

・海軍山根部隊 字民の指摘による。

・海軍迫撃砲第四中隊(池本隊) 『独立速射砲第三大隊命令』の中に部隊名を確認することができる。

・山部隊の駐屯 字民の証言による。

以上の4つの部隊による我那覇への駐屯の報告が行われている。その中でも、本壕群は位置的に、球六四〇三 独立速射砲第三部隊(一法師鐵男少佐)による丘陵地への壕の構築との関連性が深いと考えられる。

4. まとめと今後の課題

今回確認された壕は、同壕群の中でも東端に位置しており、西側部分は樹木に覆われた状態にある。しかし、今回新たに5つの壕が発見されたように、今後とも同丘陵地における壕の発見が予想される。また今後の課題として、地域住民からの聞き取り調査や、文献資料からの検証、壕の詳細な位置図の作成が求められる。

なお、本壕群はコンクリートで舗装されて現在でも確認できる状態にある。

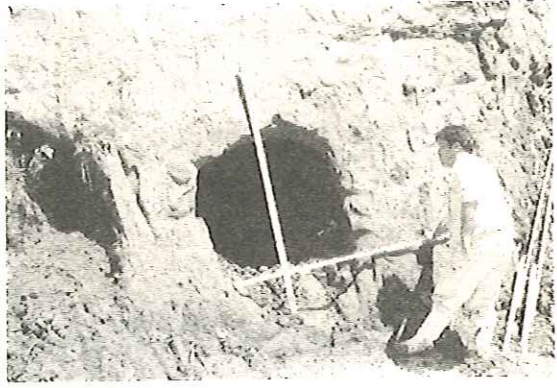


壕 2

壕発見状況



壕 1(右)、壕 2(左)



壕 2(右)、壕 3(左)



壕 3(右)、壕 4(左)

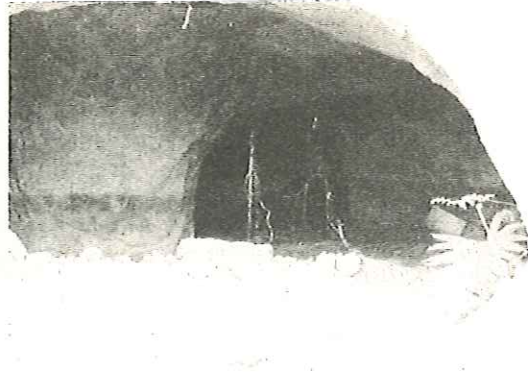


壕 3

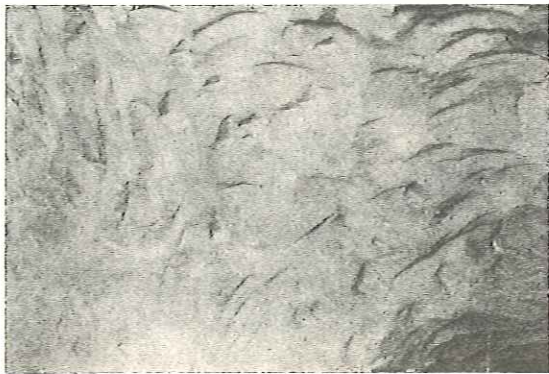
図版 4



壕 5



壕 2 内部



掘削痕



作業風景(壕 1)



図版 5

遺跡の現況(平成 18 年 2 月)

IV. 瀬長グスク他範囲確認調査概報 - 平成18年度の調査成果 -

1. はじめに

現在瀬長島で確認できる遺跡は、瀬長グスクのみである（瀬長古島遺跡は、現在の野球場の場所にあった遺跡で現在は消滅している）。市教育委員会文化課では、平成17・18年度にかけて瀬長島内における埋蔵文化財の状況を確認するための調査を行い、平成18年度は総計20箇所の調査区を設けて範囲確認調査を行ってきた。本稿では、平成18年度に行われた調査成果の概要を報告したい。

2. 調査の概要

平成18年度は、20箇所の調査区について、重機試掘（4×4m）と手掘試掘（2×2m）の2つの方法で調査を行った。調査範囲が、島内全体という広範囲にわたっており、各調査区内で立地が異なる状況にある。そこで、本項では、各調査区を立地によって大きく3つの地区に分け、各地区の状況について整理していきたい。

なお、各地区名は、本稿で仮に設けたものであることを断っておく

(1) A地区

A地区は、丘陵の北東部に位置する小丘陵面に立地し、K8 - ケ、J9 - ス、I10 - イ、H10 - ツ、G11 - ス、F12 - シ、E13 - オ、D14 - ソという8調査区から構成される地区とする。A地区では、現在の表土（1層）、米軍造成土（2層）、ウジマ層（3層）、グスク時代旧表土層（4層）、マーヅ（5層）、琉球石灰岩（6層）、島尻層（7層）という7つの基本層序としている。本地区では、大部分が米軍による掘削をうけており、3・4層が確認されたのはH10 - ツ、G11 - スのみである。3層のウジマは、ニービの風化土の方言名であり、聞き取り調査などから本地区ではウジマの土壌を利用した畑作が行われていたとの証言が得られている。G11 - スグリッドでは、4層下面において4個のピットが確認され、覆土の状況からグスク時代に由来するものと考えている。

出土遺物としては、4層から青磁、天目の小破片がごくわずかに出土している。

(2) B地区

B地区は、現在の瀬長島の丘陵上部とその周辺地域に立地し、L10 - オ、J11 - ネ、L5 - オ、L4 - ノ、K3 - ス、J12 - コという6調査区から構成される地区とする。

B地区では、現在の表土（1層）、米軍造成土（2層）、マーヅ（3層）、琉球石灰岩（4層）、島尻層（5層）という5つの基本層序からなっており、文化層は確認されなかった。これは、戦後の米軍による掘削によるものであり、頂上部では戦前と戦後の地形図を比較すると大きく標高が異なっている。今回は、確認の意味で頂上部の端に調査区を設定、発掘を行ったが、遺物の出土はなかった。

(3) C地区

C地区は、島の北西～南西部にいたる丘陵下に立地し、F17 - ヌ、H15 - シ、H14 - テ・ト、I13 - コ・ソ～I14 - サ、010 - ソ、09 - ト、N6 - トという7調査区によって構成される地区とする。C地区は、現在の表土(1層)、米軍造成土(2層)、グスク時代(3層)、新期砂丘層(4層)ビーチロック(5層)、島尻層(6層)を基本層序とする。特に、H15 - シとH14 - テ・ト、I13 - コ・ソ～I14 - サについて多くの成果が得られており、瀬長島北西部における遺跡の確認をすることができた。

H15 - シでは、グスク時代の2次堆積土が約1.8mにわたって堆積しており、シルト質と砂質土が交互に堆積していた。遺構は確認されなかった。出土遺物としては、ヤコウガイ製の貝匙、高麗系瓦、青磁、天目、土器、獣骨、貝類などが出土した。

H14 - テ・トでは、グスク時代の2次堆積土のほかに、暗褐色の旧表土面と思われる層が検出され、Pit群が確認された。調査面積が限られていたため、プランなどは確認できなかった。Pitの大きさは約15cmのものが多くみられ、最大のもので直径30cm、深さ40cmのものも確認できた。出土遺物としては、青磁を中心として白磁、土器、天目といった陶磁器、獣骨、魚骨、貝類などが確認された。特に、魚骨については、フルイを用いて検出作業を行った結果、比較的多くの資料をえることができた。青磁については、雷文帯を有するものの他、無文外反碗が多くみられた。

また、I13 - コ・ソ～I14 - サにおいても、グスク時代の旧表土面が確認された。この層からは、青磁や土器のほかに、銭貨や八双金物といった金属製品が出土している。

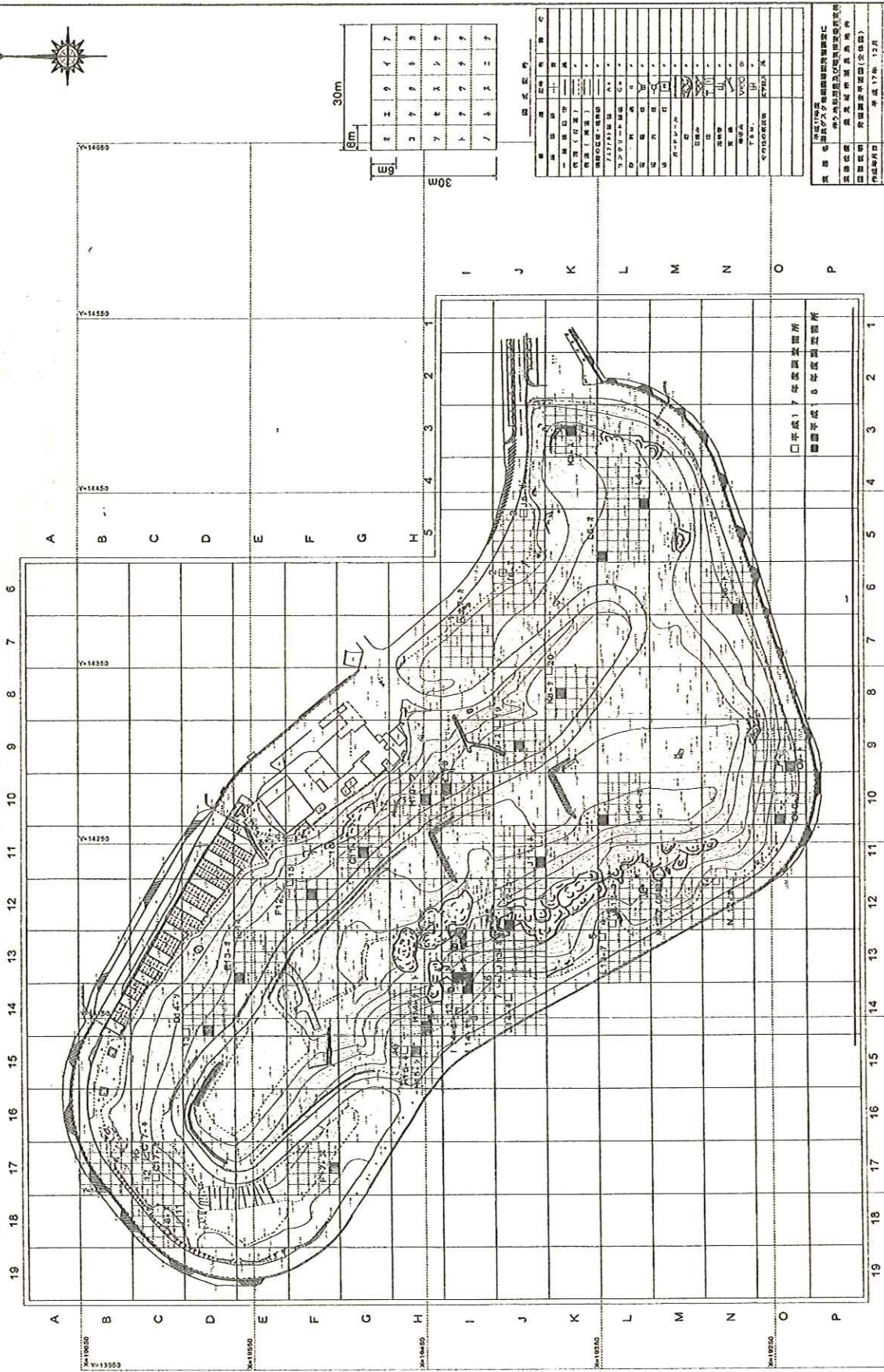
4. まとめと今後の課題

平成18年度の調査によって、新たにグスク時代の層が確認されたのはA地区である。A地区では大部分が米軍の掘削により破壊を受けているものの、一部でグスク時代の旧表土面が確認されており、部分的にはあるが埋蔵文化財が確認されたといえる。C地区については、平成17年度の調査を受けて、再度確認調査を行った。その結果、丘陵からのグスク時代の2次堆積層と、旧表土面と思われる層が確認された。また、当地区からは、青磁、白磁、土器、瓦、金属製品などの遺物が出土しており、遺跡の年代や性格を考える上で、重要な資料が得られた。

今後は、平成19年度刊行の報告書作成に向けて、各資料の詳細な検討を行い、瀬長島内における埋蔵文化財の状況についてまとめていきたい。

発掘調査平面図

(全体図) 縮尺: 1/1000

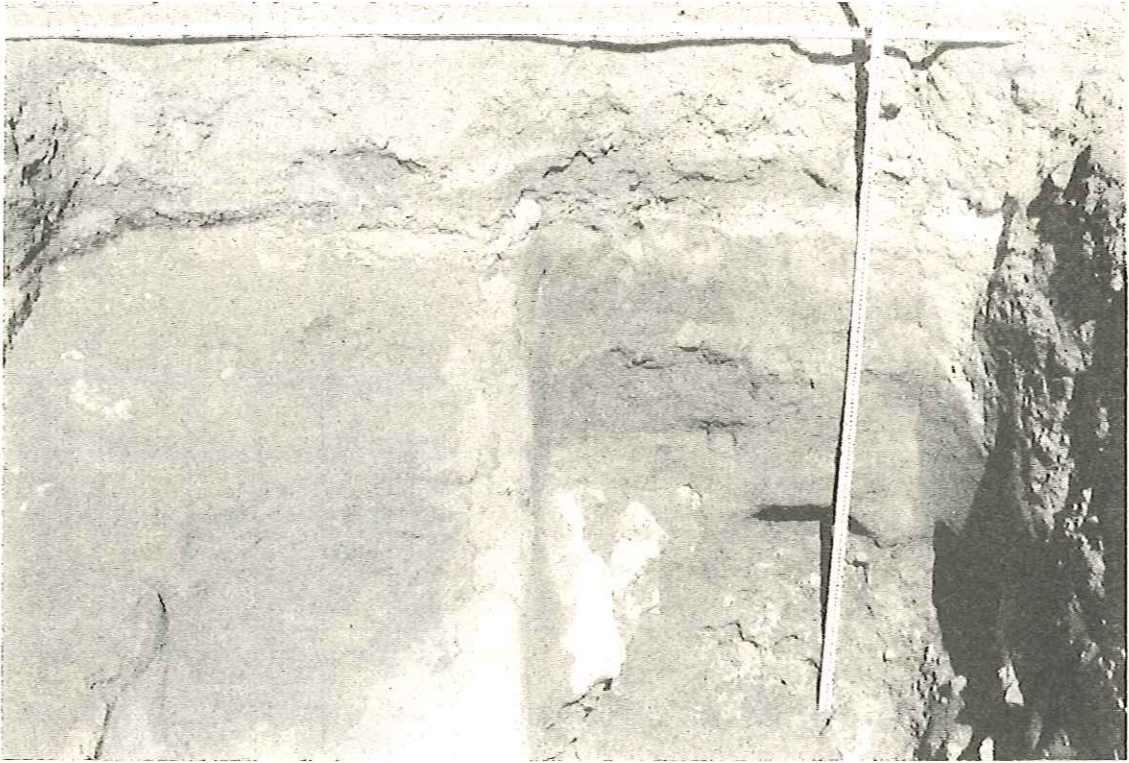


第7図 調査区設定状況図

調査年度	平成17年度
調査地区	東京都中央区本町二丁目
調査範囲	本町二丁目(全地区)
調査期間	平成17年12月
縮尺	1/1000
調査種別	発掘調査
調査実施者	株式会社

記号	説明
○	平成17年度発掘調査範囲
□	平成17年度発掘調査範囲外

30m	6m
30m	6m

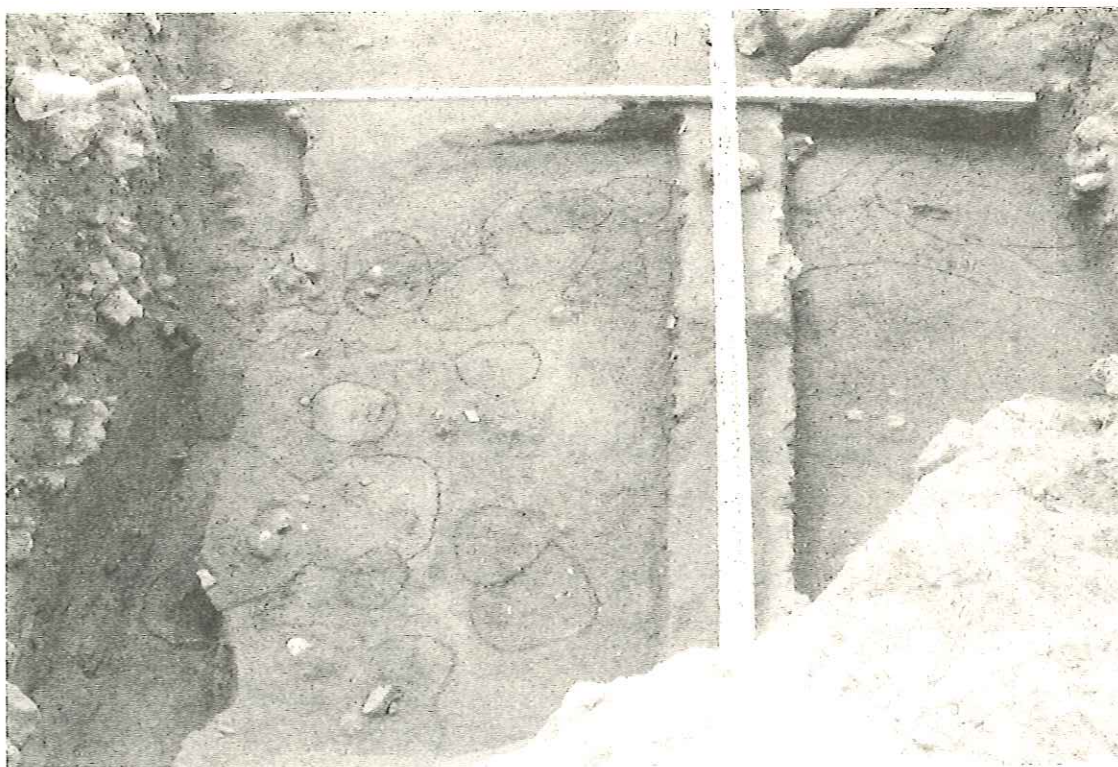


H10 - ツ北壁



H15 - シ東壁

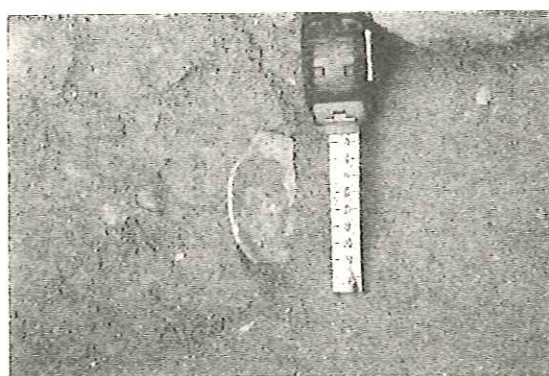
図版 6



H14 - テ・トピット検出状況



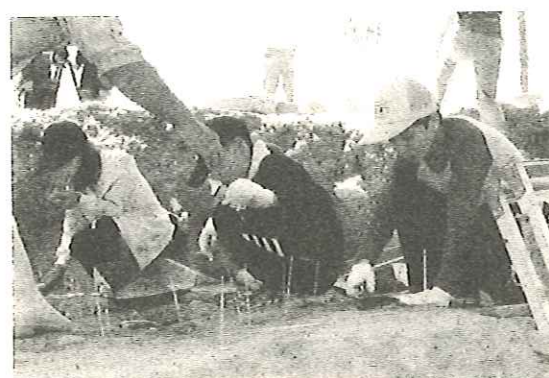
ピット半裁状況 (H14 - テ・ト)



白磁出土状況 (H14 - テ・ト)



貝匙出土状況 (H15 - シ)

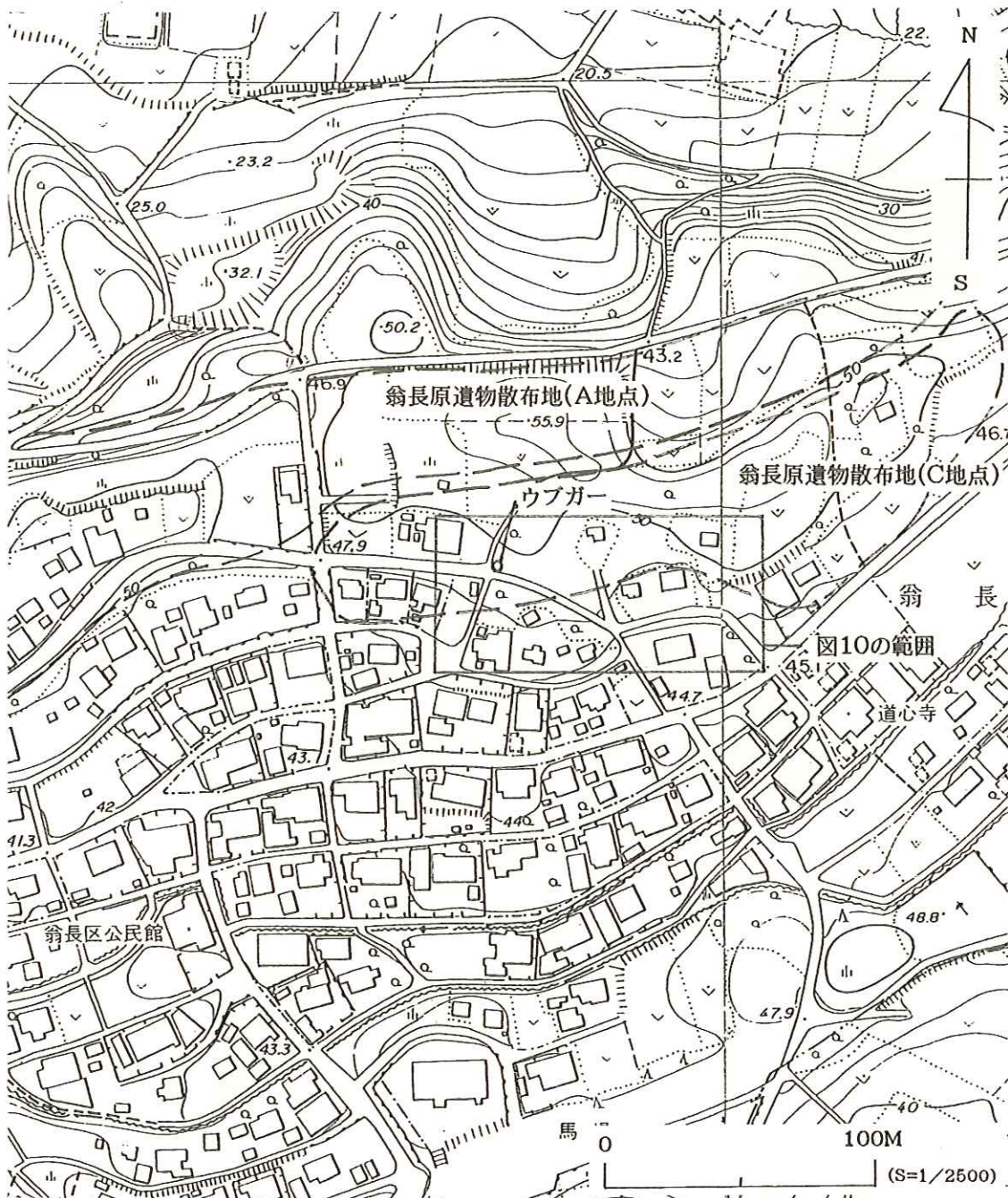


発掘体験学習

V. 翁長原遺物散布地C地点における試掘調査-石畳遺構を中心として-

1. はじめに

本調査は、字翁長の集落整備事業に伴って行なったものである。平成17年度は、工事の行なわれた土の中から、大量の貝類や陶器が確認され、それらの採集を中心に作業が行なわれた。平成18年度は、石畳の補修に伴い、石畳の範囲の確認と、石畳の下層の状況を確認する目的で試掘調査を行なった。本稿では、平成18年度に行なった試掘調査の成果について報告したい。



第8図 翁長原遺物散布地C地点の位置図

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

翁長原遺物散布地C地点は、翁長集落内に所在している。遺跡の範囲内には、住宅が立ち並んでおり、旧集落の形態を受け継いでいるものと想定される。翁長原遺物散布地C地点を含む翁長集落は、標高40～45m程の丘陵頂上に形成されている。1949年に作成された米軍地形図と比較しても大きな地形の変化は認められない。この丘陵頂上部の平地の中には、大きく3つの高まりが見られ、標高はおおよそ53～55mである。翁長に見られる3つの遺物散布地は、この高まり部分を含むか、その下面に位置しており、旧集落の形成要素と関連性が示唆される。

(2) 歴史的環境と周辺遺跡

翁長原遺物散布地C地点には、翁長原遺物散布地A・B地点が隣接している。いずれも近世・近代の遺跡として報告され、C地点同様に陶質土器・陶器、貝類などが確認されている。A～C地点とも、近世・近代における生活空間としての性格を有する。

翁長原遺物散布地A地点は、翁長集落の北側が本遺跡の範囲である。集落内の畑地や屋敷の石積みなどから近世・近代の陶器や陶質土器などが採取できる。

翁長原遺物散布地B地点は、翁長集落の西側が位置する遺跡である。特に老人ホームおなが園の北側で、二枚貝を主体とした近世・近代の遺物包含層が確認された。包含層は翁長集落から国道331号にぬける道路の左手側（急カーブ）にある。遺物として陶器・陶質土器などが散布する。

(3) 民俗的環境

石畳は、生活道路としての役割の他に、拝所を廻るための道としても使用されていたと推定される。旧暦8月15日の十五夜行事には、農作物の豊作と部落の安泰・発展を祈願する拝所廻りが行われる。図9はその道順を示したものである。

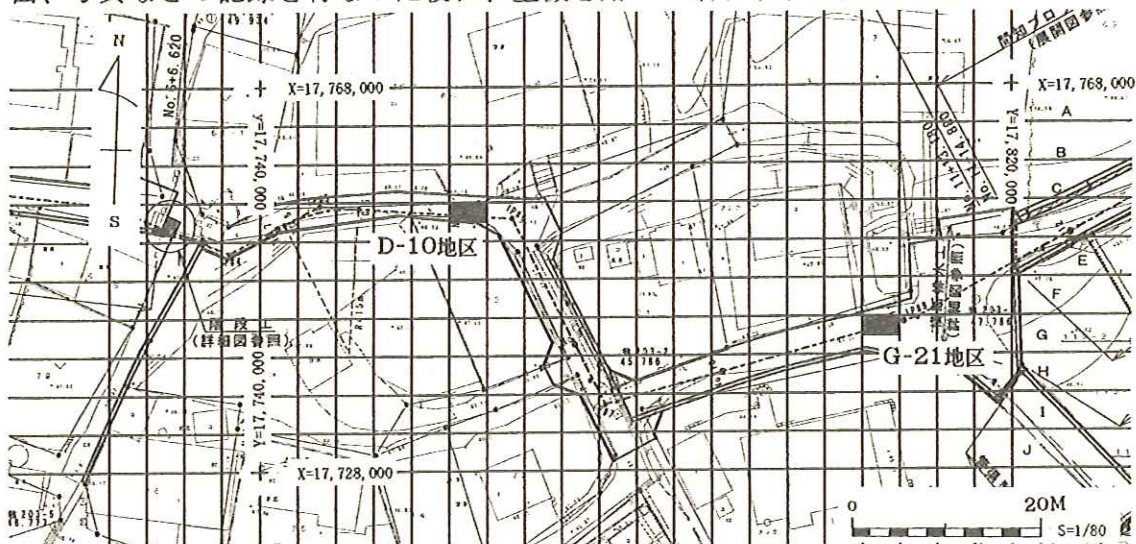
- | | | | |
|------------|-------------|-----------|--------|
| ①公民館の床の間 | ②ウブガー | ③大屋(ウフヤー) | ④地頭火の神 |
| ⑤西平 | ⑥玉城への遥拝 | ⑦ウフタキ | ⑧クチャガー |
| ⑨アカギヤマ(井戸) | ⑩保栄茂のタケーシガー | ⑪保栄茂イリウタキ | ⑫高安家の神 |
| ⑬高安家の仏壇 | ⑭井戸(メーガー) | ⑮メーストウヌ | ⑯カームシ井 |



第9図 翁長集落の十五夜御願拝所

3. 調査成果

調査は、4×4mのグリッドを設定し、そのグリッド内に1×2mの調査区を2箇所設定した。調査範囲内には、石畳が良好に残っている場所もあり、調査区内での石畳の図面、写真などの記録を行なった後に、重機を用いて掘り下げを行なった。



第10図 調査区設定状況図

(1) 基本層序

今回の調査で、本遺跡において大きく3つの時期を捉ええることができた。一つは、石畳の時期である。本時期はⅢ・Ⅳ層の段階に相当する。明確な遺物はみとめられないが概ね近世(新)～近代の時期だと考えられる。2つめは、その下位にあるⅤ層の段階である。本時期は従来の翁長原遺物散布地C地点の示す時期である。沖縄産陶器の他大量の貝類が出土するという特徴を持っている。石畳の時期よりも古いと考えられ、近世(古)として表現する。3つめは、グスク時代の時期である。今回の調査において明確なグスク時代の層は確認されないものの、Ⅲ・Ⅳ層や周辺域から青磁がわずかに採取される。これは本来あったグスク時代の層が、近世(古)の段階において人為的な影響を受けたためだと考える。近世(古)のⅤ層に関しても、近世(新)～近代の時期において人為的な影響をうけていると考える。これは、G-21地点においてⅥ層、Ⅴ層の層理面が水平になっていることから考えられる。

①層：現在の表土。

②層：アスファルト。(コーラル層)

③層：近世(新)～近代。層厚は非常に薄く、混入物は明確に認められない。

④層：近世(新)～近代。1 cm程度の赤褐色と黒色粒子を密に含んでいる。石灰岩もわずかに見られる。貝は下部にわずかに認められる。

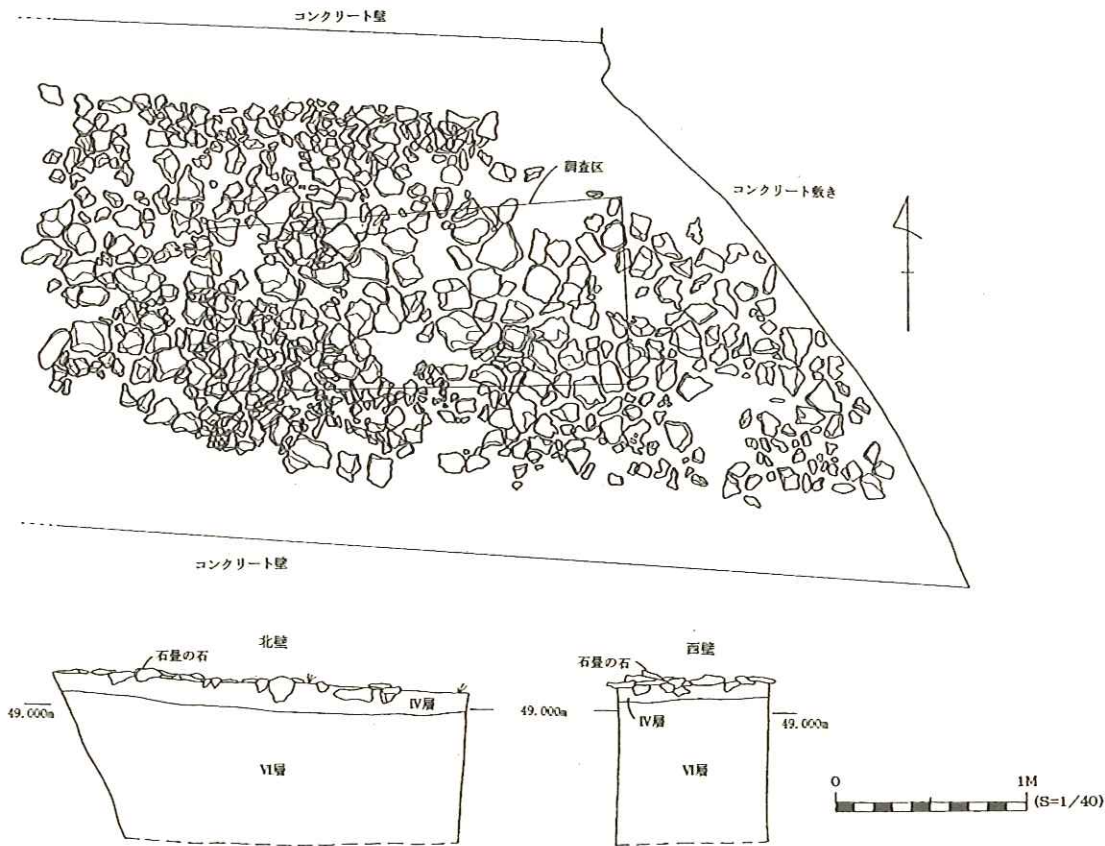
⑤層：近世(古)。貝層。二枚貝などの貝類を密に含んでいる。その点でⅣ層とは明確に分層される。

⑥層：基盤のクチャ。

(2)D - 10地区

本調査区の石畳は、両脇をコンクリート壁に挟まれ、表面に雑草が生えているものの、石畳が壊された跡はなく、残りの良い状況であった。周囲の雑草の掃除を行ったところ、幅約2.0mの石畳が明瞭に確認できた。石畳は、石灰岩を中心に敷かれており、表面は摩滅しているものが多い。その他に、極僅かにニービを用いられている。また、石畳の石の間や、その周囲からは海産貝類が確認された。これは、周囲の⑤層が2次堆積したものと考えられる。

発掘調査の結果、D - 9地区では、IV層とVI層が確認された。大きく2つの時期が想定される。IV層とVI層の時期や性格については基本層序で述べた通りである。本地区では、V層が認められないが、IV層とVI層の層理面が水平であることから、石畳形成時にV層が人為的に失われた可能性もある。グスク時代についても同様である。

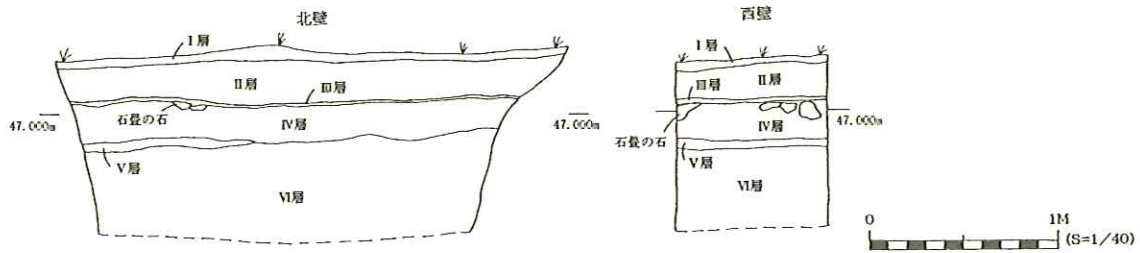
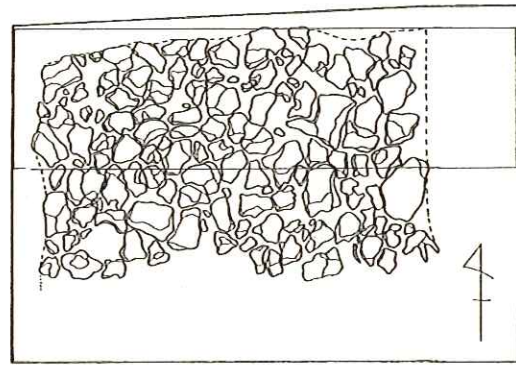


第11図 D - 10地区平面図、北・西壁断面図

(3)G - 21地点

G - 21地点では、現況の段階での石畳は確認されていなかった。それは、住宅前の整地のためのコンクリートが覆っていたためである。しかしながら、その延長線上には、石畳が一部残っており、本調査区においても、石畳の残っている可能性があったため、調査区を設けて試掘調査を行った。その結果、現在の表土から約25cm下から、調査区内全体に石畳が確認された。そこで、掘り下げを行なう北側部分の石畳を記録し

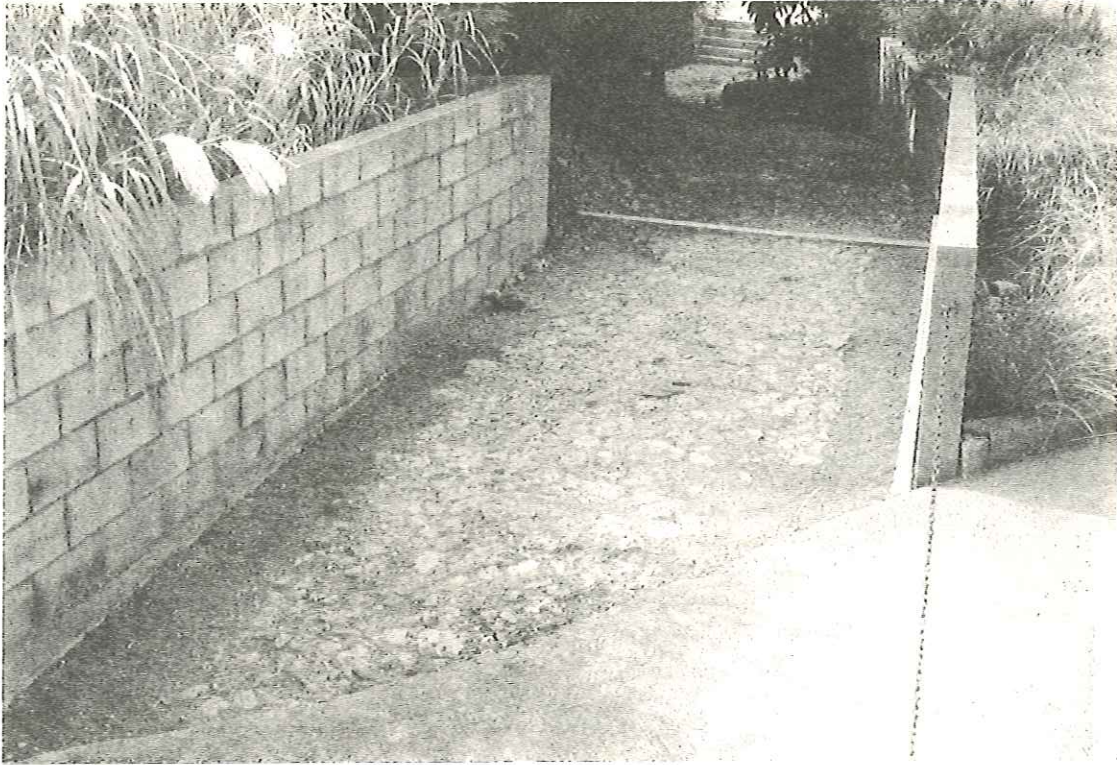
た後、重機のバケット幅分のサブトレンチを設け、さらに掘り下げを行なった。G-21地区においては、I～VI層が明瞭に確認され、本遺跡の時代変遷を考える上で重要な成果を得ることができた。また、V層からは、貝類が非常に多く出土していた。今回は、これらの貝類の整理が不十分であり、今後、資料整理終了後に改めて報告を行いたい。



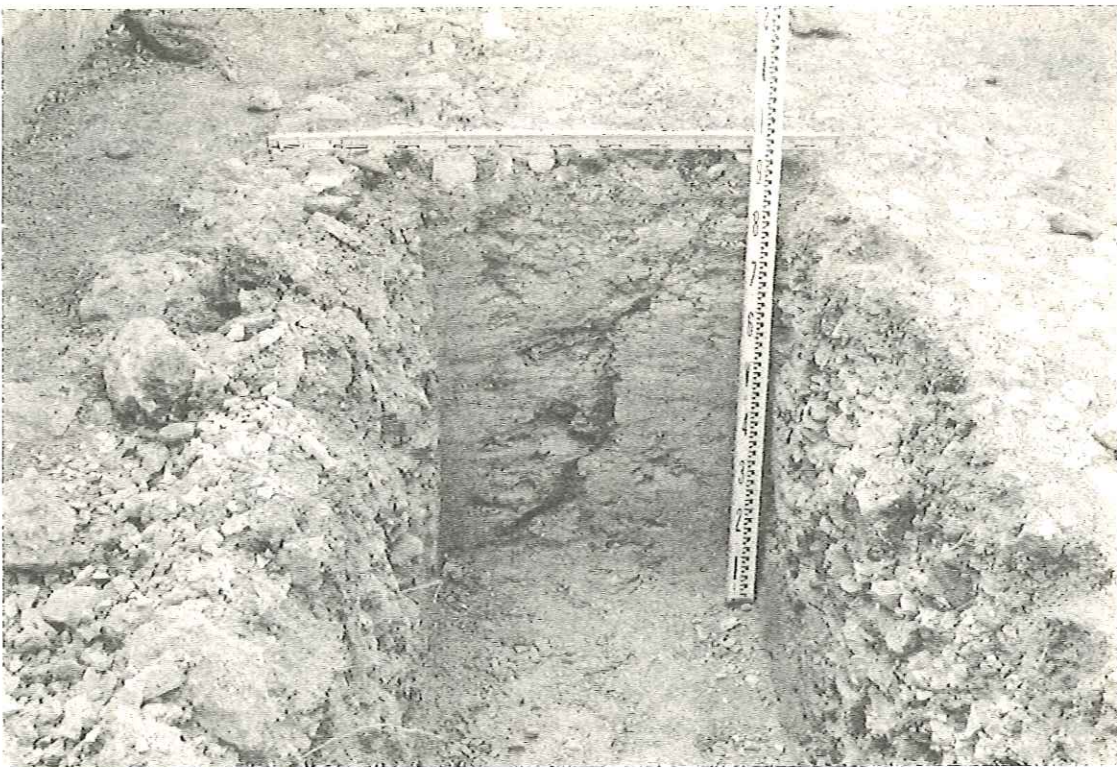
第12図 G-21地区平面図、北・西壁断面図

4. まとめ

今回の発掘調査の結果、G-21地点において明瞭な層序の変化を捉えることができた。まず、石畳の下に明瞭に確認された貝層(V層)は、従来確認されていた、近世における翁長原遺物散布地C地点の時期の層だと考えられる。IV層は石畳形成時の段階の層だと考えられ、III層は、石畳使用時の旧表土面であると考ええる。また、周辺域から青磁片などが表面採取され、近世以前にはグスク時代の生活空間であったことが想定される。その結果、グスク時代→近世古(V層)→近世新～近代(III・IV層)としての時間的な変遷が想定される。

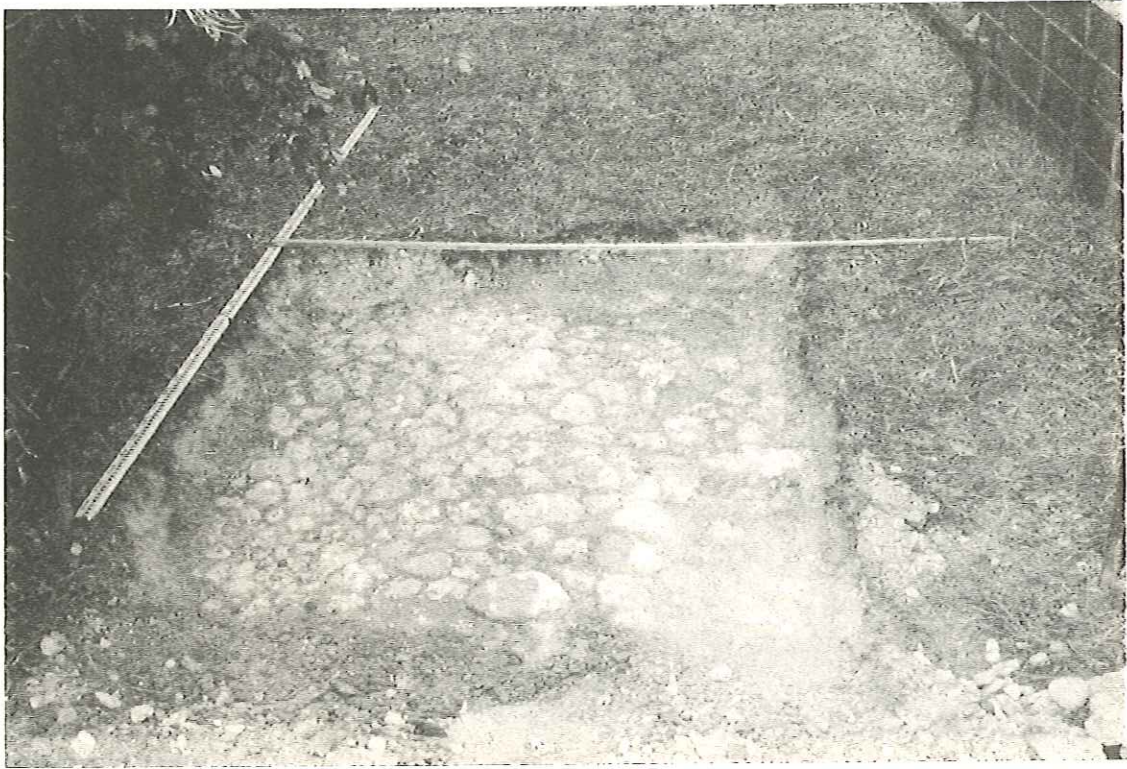


D - 10 地区石畳検出状況



D - 10 地区北壁

図版 8



G - 21 地区石畳検出状況



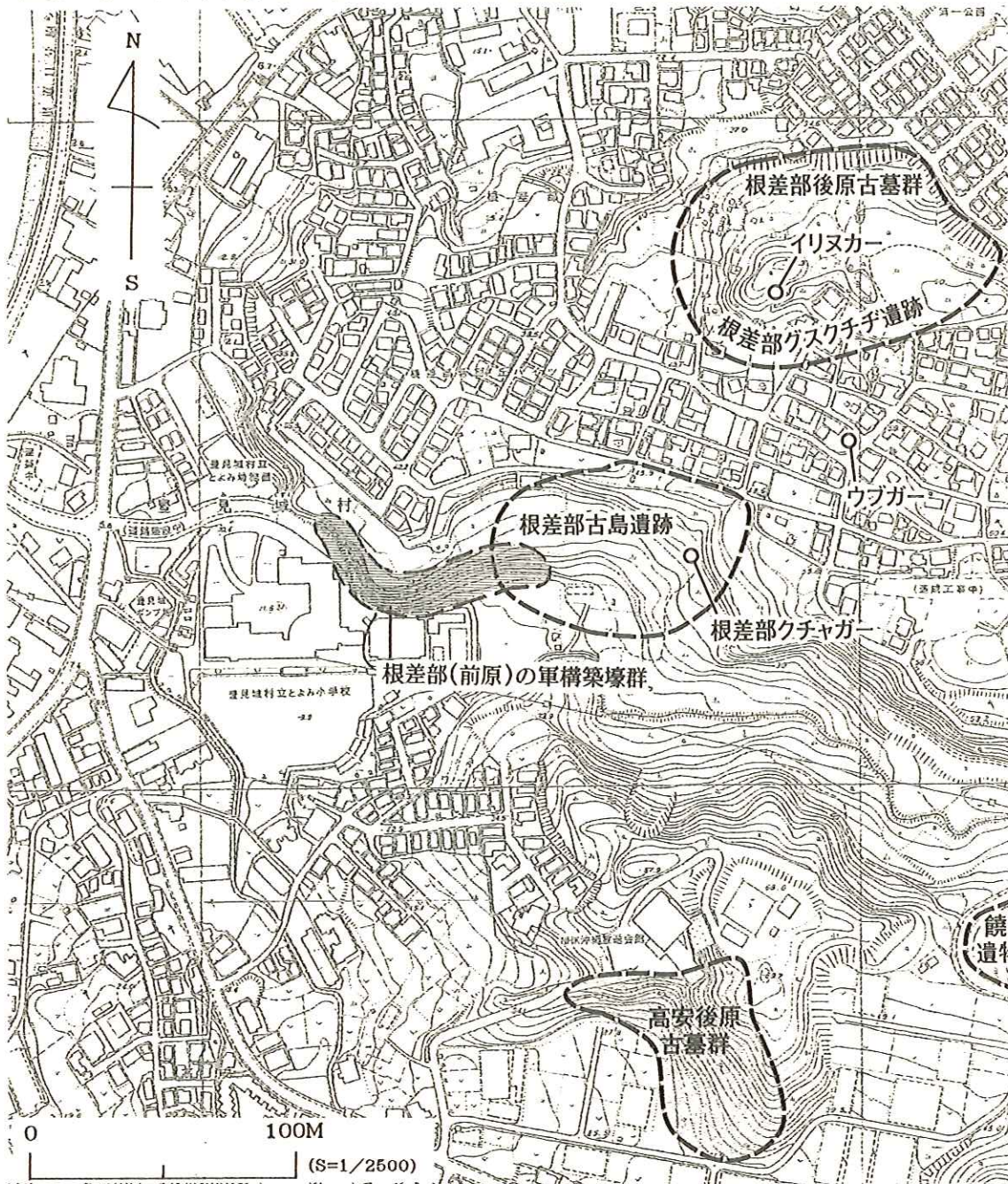
G - 21 地区北壁

図版 9

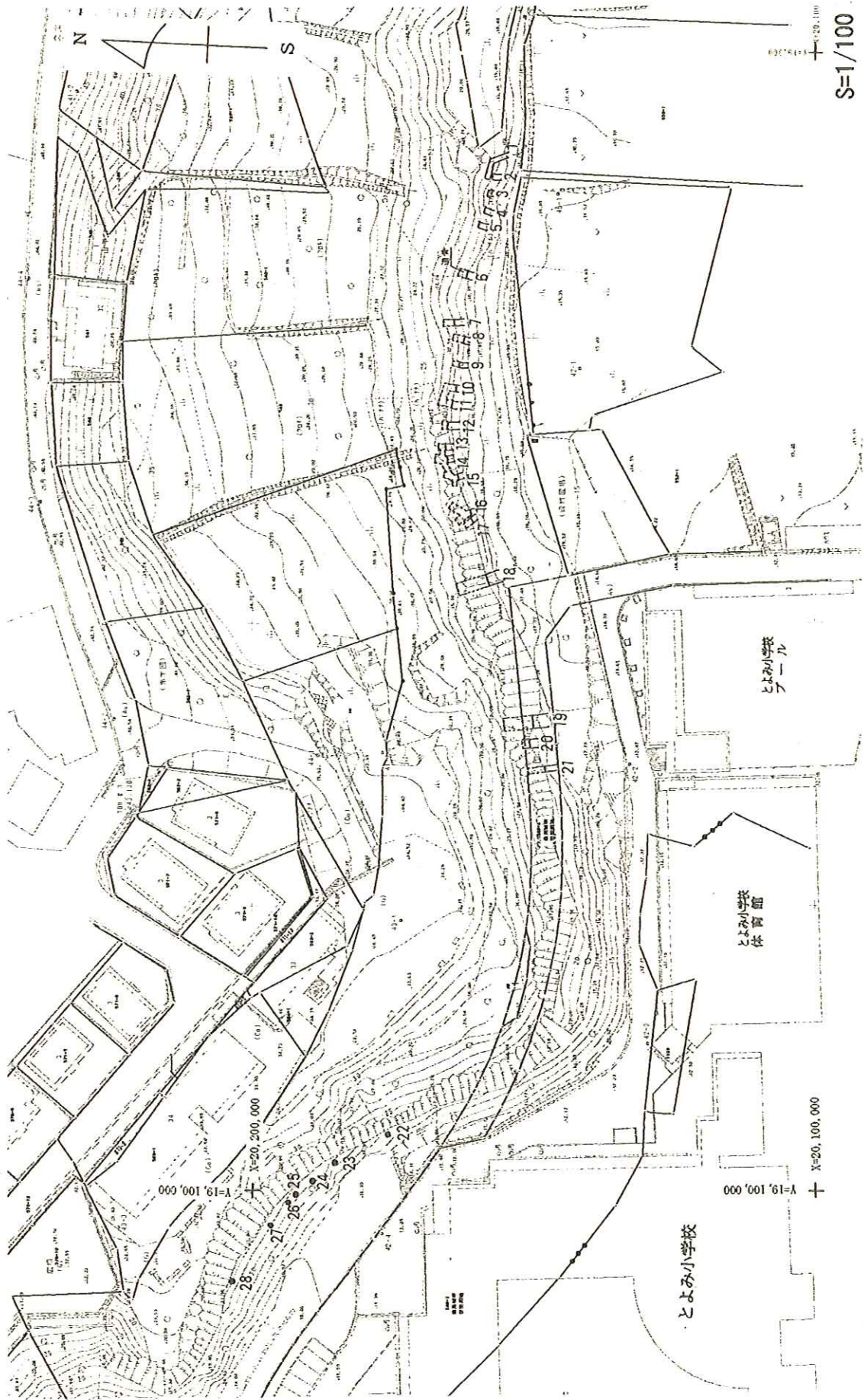
あざね さぶ めーばる ぐんこうちくごうぐん
 VI. 字根差部(前原)の軍構築壕群

1. はじめに

本壕群は、市道254号線改築事業に伴って発見されたものである。壕は、とよみ小学校の北東側の丘陵部に位置しており、複数の壕があいついで発見された。壕群は、平成16年11月に初めて確認された。これらは、根差部クチャガーの調査と並行して壕の位置記録が行われた。その後平成18年12月5日、13日、28日と工事が進むにつれ、その発見数も増えていき、総数28基にのぼった。本壕群は、これまでの報告に認められないものであり、新たな壕として「根差部(前原)の軍構築壕群」として報告を行う。



第13図 根差部(前原)の軍構築壕群位置図



第14図 塚群位置図

2. 壕の概要

今回の工事に伴って発見された壕は総数28基であり、丘陵斜面地の東側より壕1～28と名付けた(壕口1～21は平成16年11月、壕口22～28は平成18年12月発見)。壕群は、島尻層を掘りこんで構築されており、壁面には構築の際の掘削痕が確認できる。また、壕19では、地面より0.6mのところを灯を置くための0.7×0.3mの長方形の掘り抜き跡が2つ確認された。構築の特徴として、島尻層のニービ層とクチャ層の境目あたりから掘り込まれている。天井～側面部はニービ層で形成され、浸透してくる雨水によって表面に石灰が癒着している。床面部分はクチャ層であることが多く、我那覇丘陵の軍構築壕群の構築方法とも類似している。壕内からは、鉄片や砥部焼(スンカンマカイ)、照明弾などの他、遺骨も確認された。

壕の一般的な形態としては、高さ1.3～1.4m、幅1.6～1.8mでドーム型をなしているものが多く、奥行きは約1.0～3.0mほどである。今回発見された壕の中で最大のものは壕18で、高さ1.6～2.0m、幅1.9～2.2m、奥行き5.5mで、内部に段差がみられた。また、壕1や16のように、内部で折れ曲がったり、枝分かれする壕もみられ、壕10・11、13～15に関しては内部でつながっている状況が確認できた。

3. 字根差部における日本軍の駐屯

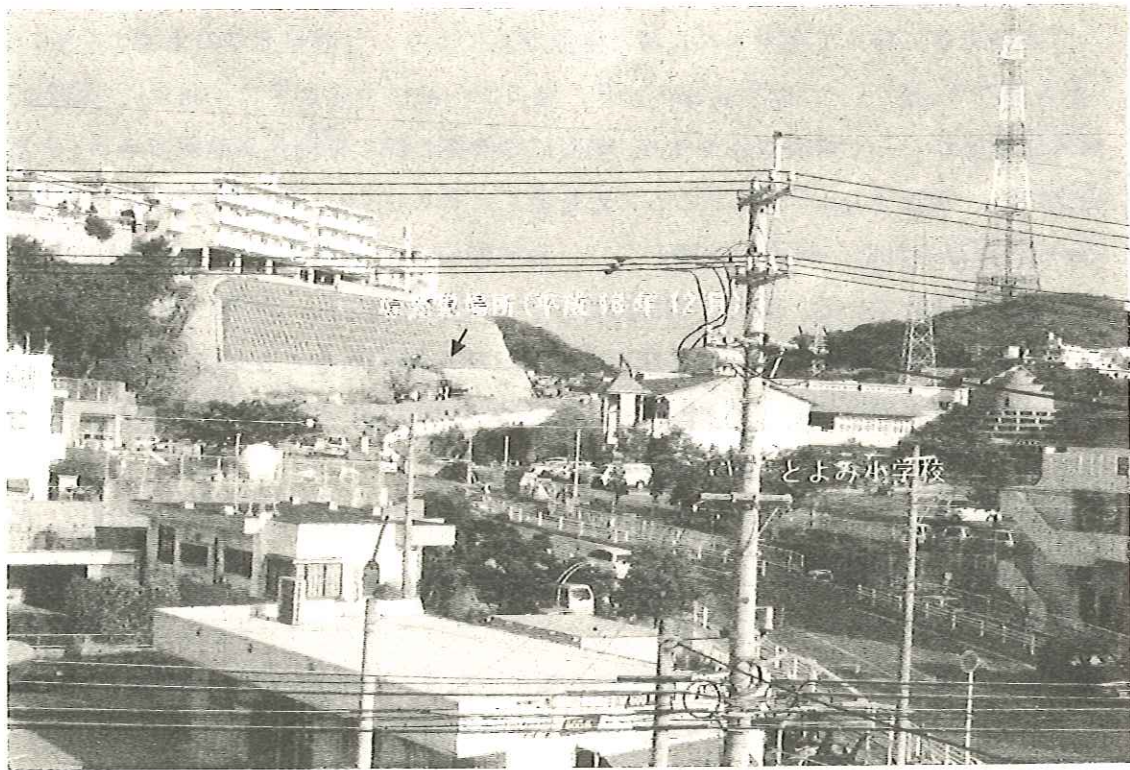
『豊見城村史 第6巻 戦争編』より、字根差部に駐屯したとされる日本軍に関する記事を抜粋して紹介する。

・第九師団(武部隊) 1944年5～7月にかけて駐屯。12月に台湾へ移動。国民学校、字公民館、民家に駐屯し、サーターヤアの広場などにも兵舎ができた。同時に、各地で陣地壕の構築も本格的に始まった

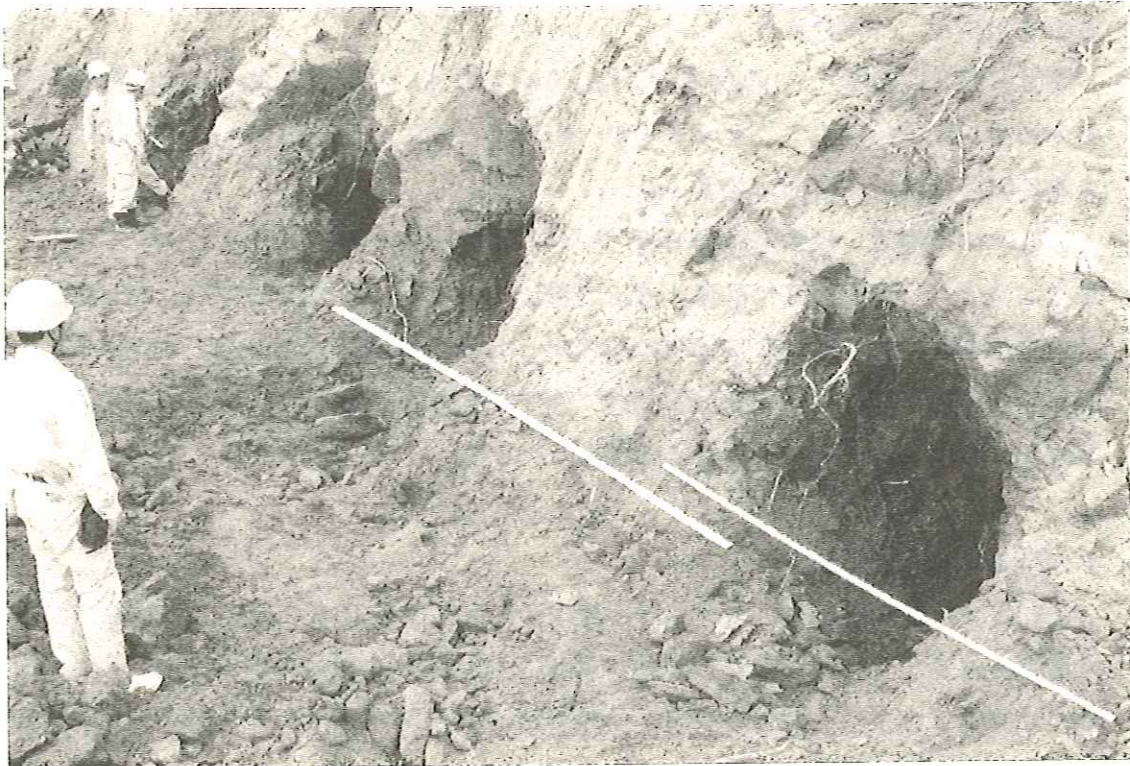
・球部隊、山部隊、海軍部隊の一部 1944年12月～1945年1月にかけて駐屯。民家やムラヤー、周辺の壕に駐屯。周辺の壕については、知念森の3箇所の野砲陣地(陸軍部隊)、根差部の東側現在の長嶺中との間の斜面地の陣地壕(砲兵部隊)、西南側の根差部の入り口の斜面地の海軍の2つの陣地壕、東南側の斜面地のある自然壕で住民の壕(マヤーガマ)などがあげられている。

4. まとめと今後の課題

今回発見された壕群は、これまでに報告されていないものであり、「根差部(前原)の軍構築壕群」として報告を行った。構築の方法や出土資料などから軍との関連性が深いと推察されるが、現段階では、文献資料や聞き取り調査からの検討が不十分であり、今後の課題としたい。



遺跡遠景

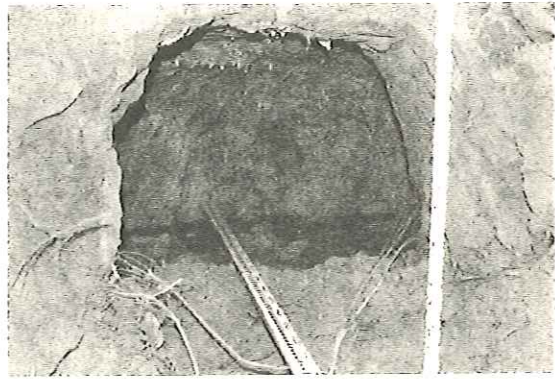


右より壕 23~27号

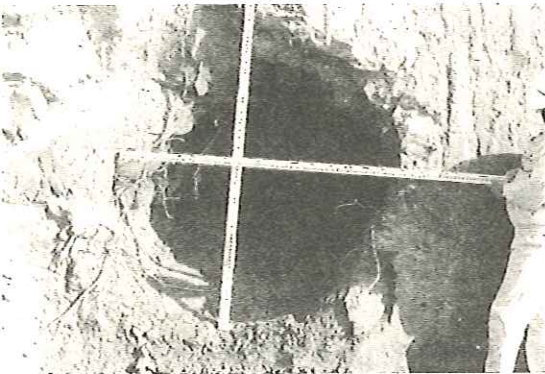
図版 10



壕 22 号



壕 22 号内部



壕 23 号



壕 26 号



壕 27 号



照明弾(壕 23 号より出土)



スキャンマカイ(壕 27 号より出土)



作業風景(壕 23 号)

図版 11

むすびに

現在豊見城市で確認されている遺跡(戦争遺跡含まない)は 73 遺跡であり、その内の 5 遺跡は、開発などによる工事で消滅している。また、戦争遺跡については、『豊見城村史 第 6 巻 戦争編』(豊見城村役所 2001 年)や『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅰ)－南部編』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 年)で報告が行われている。

今回 6 つの遺跡の報告を行ったが、調査後の状況は各遺跡で異なっている。「我那覇丘陵地の軍構築壕群」「瀬長グスク他範囲確認調査」は現在でも遺跡が残っている状態にあり、「翁長原遺物散布地C地点－石畳遺構－」については、表面をコーラル敷きで覆うようなかたちで遺跡が保護された。「字平良の海軍砲台に伴う軍構築壕群」、「根差部(前原)の軍構築壕群」、「字高嶺の試掘－高嶺古島遺跡内」については、工事に伴いその状況を現在では確認することはできない。これらの緊急で調査が行われる遺跡について、市教育委員会文化課では遺跡の保護と活用を第一の目的としているが、現在の生活の中での保存と活用は言葉以上に難しく、地域の協力なしには実現困難なものである。また、今回の壕の調査はいずれも工事中に発見されたものであり、調査は短時間での効率的な記録調査に迫られた。これらの経験をふまえ、今後の課題として、地域内における文化財の理解と活用方法の検討と記録調査における各遺跡の種類ごとの調査用紙の作成があげられる。また、これらの調査結果をを分かりやすい言葉での市民への情報公開を行っていく上でも、本誌『まだま』での報告に努めていきたいと考える。

参考文献

- ・ 沖縄県教育委員会 1990 年 『高嶺古島』
- ・ 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 年 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅰ)－南部編－』
- ・ 豊見城村教育委員会 1988 年 『豊見城村の遺跡』
- ・ 豊見城村役所 2001 年 『豊見城村史 第 6 巻 戦争編』

編集後記

文化課は平成12年4月にスタートし、文化係、市史係の2係で事業を進めてきましたが、平成18年度からは市史係を文化係に統合し、1係となりました。

今回の『まだま』第1号は職員全員で企画し、文化課の事業内容を多くの市民へ周知を図り、理解していただくことを目的に発刊しました。印刷は輪転機で行ったため、写真等は見づらい部分もあるかと思いますが、手作りの味があり、職員全員の思いが詰め込まれた魅力ある刊行物になったのではないかと思います。

本号の内容は、赤嶺みゆき「市史移民編『第4回 世界のウチナーンチュ大会』関連のとりにくみ -『世界のトミグスクンチュ歓迎会』での聞き取り調査と移民関連展示について-」、久貝弥嗣「平成18年埋蔵文化財に関する調査報告」の2題です。平成18年度の事業報告が主な内容で、両名ともに今後の課題も提起しているものです。

特に前者の報告では、移民編編集のための調査は、ウチナーンチュ大会参加者や引揚者からの聞き取り調査だけでは情報や資料の収集に限界があり、現地調査の必要性など今後の事業の進め方に大きな課題を提起しています。

また、後者は豊見城市内において戦跡等が工事中に発見された際、いかに効率よい方法で調査を行えるかという課題等を提起しています。そのほか、本稿では瀬長島範囲確認調査での概要報告も行っています。

今後も文化課では職員が一致団結し『まだま』を継続して発刊していく所存です。そして、ゆくゆくは多くの市民が共感共有できる故郷の誇りのひとつとして、豊見城の文化を内外に発信できるようにと願い、文化行政に携わる者として気持ちを新たにしているこの頃です。

まだま 第1号

2007(平成19)年 3月31日

編集・発行 豊見城市教育委員会 文化課

901-0232 豊見城市字伊良波 392 番地

(豊見城市立中央図書館 1階)

tel (098)856-3671

fax (098)856-1215

平成18年度 文化課スタッフ

文化課長 宜保 馨

文化係長 与那嶺 豊

主 査 大城 竜也

嘱 託 儀間 淳一 瑞慶覧 峰子

稲福 政斉 赤嶺 みゆき

佐久本 洋子

臨時職員 久貝 弥嗣 伊波 かおり

